志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（14）

志布志町立志布志中学校屋内運動場改築事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

志布志新城跡

１９９２年３月

鹿児島県曽於郡志布志町教育委員会

空堀埋土状況
（武道館側より）

序　　文

志布志中学校が現在地に開校したのは昭和22年のことで、戦前は青年学校の敷地であったと聞いております。その後、校庭の拡張工事や武道館建設等、随時施設の整備が図られて今日の姿に至っております。旧体育館は、昭和38年に建設され、幾多の卒業生を送ってまいりましたが、永年の風雪に耐えかね、以前より老朽化が目立ち、再建に踏み切ったものであります。用地については、周辺の敵地を色々と検討を重ねましたが、規模の拡大もあり結局現在地再建に決定しました。

同所は、南北に連なる台地が、途中で東西両側から深い谷が入り込みくびれ部となっており南側に校庭が、北側に校舎棟が建っております。この校庭側の台地は、新城跡であるということは、以前より判かっていましたが、現状では確認できないものの古い絵図に、このくびれ部分に土塁と併行した空濠が記載されていることが判明し、文財保護と学術の見地から、施工前に町単事業としてこの確認調査を行うことになりました。

確認調査は昭和62年３月に実施され、その結果、記録に残されていた通り、地中下に土塁の裾部とそれに続く空濠の一部が検出されました。これにより志布志町教育委員会では、建設危機工事により、遺構上半部が破壊されてしまうことから、後世に伝えるためこの地中遺構を記録保存することになりました。

同年７月、旧体育館は撤去され、建設部分の発掘調査に入りました。調査の進展と共に、今まで平面的な絵図上の遺構でしかなかった空堀が、徐々にその姿を表わし、最終的には、旧体育館直下に、発掘部分延長30mにわたり、幅８ｍ、深さ６ｍの壮大な大空堀が出現しました。中世山城の防備の堅固さを改めて認識させる十分な迫力を持つものでした。

現地は記録保存処置の終了後、直ちに埋め戻され、現在新しく大きな体育館が建設され、生徒たちの体力向上に十二分活用されております。

ここにその調査結果を報告書として発行いたしますが、この報告書が文化財の保護と学術研究の為広く活用されることを願ってやみません。

顧みますとこの成果は、ひとえに、調査を担当して頂いた県教育庁文化課の立神次郎先生の、文化財保護に対する熱情と、本町の保護行政に対する御理解無くしてはなしえないものでした。７・８月の酷暑の中、工期の都合で調査期間の制限もあり、又、期間中には暴風雨の接近もあり、調査員の御苦労は筆舌に尽くし難いものがあったことと存じます。紙上をもちまして改めて深甚なる感謝の意を表します。

又、重機借り上げ等に多大な御支援を賜わり溝口重機建設をはじめ、工事関係者、調査作業に協力頂いた志布志中学校関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成４年３月

志布志町教育委員会

教育長　徳重俊二

例　　言

1、本報告書は、昭和62年度に実施した志布志町立志布志中学校屋内運動場改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2、調査は、志布志町教育委員会が実施した。

3、調査の組織は、調査の経過の中で記した。

4、本書の執筆及び編集は、立神、米元が行った。

5、本書で用いたレベル数値は、すべて海抜絶対高である。

6、本書の遺物番号は、通し番号とし、挿図本文中の番号は一致する。

7、本書で使用した地図は、鹿児島県所有のものと、志布志町所有のものを使用した。

目　　次

口絵
序文
例言
第１章　調査の経過 …… 3
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 3
　第２節　調査の組織 …… 3
　第３節　調査の経過 …… 4
第２章　遺跡の位置及び周辺遺跡 …… 8
　第１節　遺跡の位置 …… 8
　第２節　周辺遺跡 …… 9
第３章　調査の概要 …… １６
　第１節　確認調査の概要 …… １６
　第２節　本調査の概要 …… ３３
　第３節　出土遺物 …… ３５
第４章　まとめにかえて …… ３９

挿　図　目　次

第１図　新城跡の位置と周辺遺跡 …… １２
第２図　確認調査トレンチ配地図 …… １６
第３図　新城跡の調査位置及び周辺地形 …… １７～１８
第４図　土塁跡・空堀跡及び確認調査トレンチ配置図 …… １９～２０
第５図　第１・第２トレンチ検出遺構平・断面図（土塁・空堀）…… ２１～２２
第６図　土塁跡・空堀跡・溝跡検出状況平面図 …… ２３～２４
第７図　第２トレンチ堀切断面図及び検出状況 …… ２５～２６
第８図　第４トレンチ堀切断面及び検出状況 …… ２７～２８
第９図　空堀跡・土塁跡・柱穴（Ｐ１からＰ８）　検出状況平面図…… ２９～３０
第10図　柱穴検出状況平面実測図 …… ３１
第11図　出土遺物実測図 …… ３２
第12図　出土遺物実測図 …… ３４
第13図　縄文時代遺物出土状況及び石器実測図 …… ３６
第14図　出土遺物実測図 …… ３７

図　版　目　次

図版１　１、調査地全景（運動場側より）　２、調査風景（１トレンチ）
３、調査風景（１トレンチ）　……４１
図版２　１、調査風景（１トレンチ）　２、空堀検出状況（２トレンチ）
３、土塁内完掘状況（２トレンチ）　……４２
図版３　１、完掘状況（３トレンチ）　２、土塁盛土状況（２トレンチ）
３、空堀掘り下げ状況　……４３
図版４　１、調査風景（空堀）　２、調査風景（空堀）　３、調査風景（空堀）……４４
図版５　１、土塁残存部（向う武道館）　２、完掘状況（４トレンチ）
３、溝状遺構検出状況（武道館側より）　……４５
図版６　１、空堀検出状況（武道館側より）　２、空堀検出状況（武道館側より）
３、空堀埋土実測風景（向う武道館）……４６
図版７　１、柱穴検出状況（土塁側）　２、柱穴完掘状況　（武道館より）
３、空堀埋土状況（武道館より）……４７
図版８　１、空堀埋土状況（武道館側より）　２、空堀埋土状況（武道館側より）
３、調査風景（縄文時代早期遺物包含層　……４８
図版９　１、調査風景（縄文時代早期遺物包含層）　２、縄文時代早期遺物包含層完掘状況
３、縄文時代早期遺物包含層石器出土状況　……４９
図版10　１、青磁　２、青磁の染付・須恵器・陶器……５０
図版11　１、備前焼・薩摩焼・陶器　２、塞ノ神式……５１

表　目　次

表１　周辺遺跡地名表　……１３
表２　周辺遺跡地名表　……１４
表３　周辺遺跡地名表　……１５

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

志布志町教育委員会は、町立志布志中学校の屋内運動場が老朽化したために、昭和62年度に改築を計画した。

当初の計画では、学校隣接地の民有地を買収して建築しようと計画したが、買収が不可能となったために現屋内運動場を取り壊し、拡張して建築するように計画変更した。

しかし、屋内運動場建築予定地の一部は、新城或にあたり、削平された土塁が現存し、空堀も想定されるため、鹿児島県教育委員会と協議を重ね、さらに、昭和61年10月14・15日の両日において現地や志布志町教育委員会で打合せを実施した。

その結果、１、事前に土塁及び空堀について確認調査を実施すること。２、山城以前の遺物包含層の有無を認識すること。３、現屋内運動場を取り壊した後に新しく建築する屋内運動場の敷地内の確認すること。４、高城跡や新城跡を含む地域について地形測量も実施する方向で検討すること。などを協議した。

志布志町教育委員会は、その後も鹿児島県教育委員会文化課と協議を重ね、昭和62年３月16日から３月27日に確認調査を実施し、地形測量は外部に依頼し文化課の指導のもと実施することとした。調査の結果、土塁跡と空堀が確認され、特に、空堀は片薬研堀の形態で城の外域を考えるうえからも貴重な資料であり、現屋内運動場部分については、施設の取り壊しが不可能なために次回の調査に委ねることとした。

確認調査に基づき鹿児島県教育委員会では、屋内運動場の計画変更等の処置を講じて、現状で保存することが望ましい。やむを得ず計画変更が不可能な場合は、土塁及び空堀の完全記録保存をすること。また、堀にかかわる施設（棚・橋など）の確認・記録。新設の屋内運動場敷地内の遺構確認・記録保存をすることが望ましいとの事業報告をした。

志布志町教育委員会は、確認調査の結果に基づき鹿児島県教育委員会文化課と協議を重ねた結果、屋内運動場敷地内について記録保存を実施する運びとなり、昭和62年７月13日から同年８月９日までの実働20日間調査を実施した。

第２節　調査の組織

１、一次調査

事業主体者	志布志町		
調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	野間　隆
調査事務	〃	社会教育課長	山角　利行
〃	〃	課長補佐兼	
		文化体育係長	那加野久廣
〃	〃	主査	畦地　正昭
調査担当者	〃	主事	米元　史郎

調査担当者	鹿児島県教育委員会	主査	立神　次郎
〃	〃	〃	中村　耕治

2、二次調査

事業主体者	志布志町		
調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	野間　隆
			徳重　俊二（平成３年度）
調査事務担当者	〃	社会教育課長	山角　利行
〃	〃	〃	慶田　泰輔（平成３年度）
〃	〃	課長補佐兼文化係長	那加野久廣
〃	〃	課長補佐	井手　富男（平成３年度）
〃	〃	体育文化係長	前田　泰郎（63･4～）
			下平　晴行（平成３年度）
〃	〃	主査	畦地　正昭
〃	〃	主事	荒平　安次
〃	〃	係	谷口　隆博
〃	〃	〃	杉田　聖次（～63･3）
調査担当者	〃	主事	米元　史郎
〃	鹿児島県教育委員会	主査	立神　次郎

なお、調査、企画にあたっては県教育庁文化課長桑原一廣（昭和61年度）、同文化課長吉井浩一、同課長補佐川畑栄造（昭和62年度）、同主幹中村文夫（昭和61年度）、同主幹森田齊（昭和62年度）、主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長立園多賀生（昭和62年度）、同企画助成係長浜松巌（昭和62年度）氏等の指導・助言を得、また、文化財保護護審議会委員山畑敏寛、同委員永山又男、同委員瀬戸口望、志布志町溝口重機建設代表取締役溝口龍男、町教育委員会管理課長加藤光三郎、同管理係長毛野治、志布志町建設課長西坂弘行、同建築係長高瀬一雄（昭和62年度）氏等の協力も得た。

第３節　調査の経過

新城跡は、町立志布志中学校運動場及び施設等が城或中央部の大部分を占め、台地周辺部分は、雑木林や杉或いメダケが繁茂し覆っている。

今回、屋内運動場の老朽化に伴い新城或及び隣接地がその対象となるために、協議の結果、確認調査が必要となり、昭和62年３月16日から３月２７日までの実働20日間一次調査を実施し、土塁や空堀等を確認した。その結果、翌年には記録保存をする運びとなり、昭和62年７月13日から８月９日までの実働20日間二次調査を行った。その間の調査経過は、日誌抄をもってかえる。尚、整理作業については、平成３年12月より平成４年３月28日まで実施した。

一次調査

3月16日（月）　調査開始。2×16.5m（第1トレンチ・Z－29・30区）を設定する。第1トレンチ表土掘り下げ、Z－29区の南側は表土下10cmでアカホヤ層を確認し、北側への傾斜を認める。

3月17日（火）　雨天のため現地での作業を中止し、室内作業（新城に関する資料収集）。

3月18日（水）　グリッド設定作業。グリッドは武道館の南側排水溝に沿った線を基準とし、10m×10mを単位とする。第2トレンチ（X－28・29・30区）を土塁跡と空堀想定地にかかるように設定し掘り下げる。土塁跡と考えられる堆積状況を確認する。第1トレンチ掘り下げ、地表面下約1.5mの所にトロッコの車輪を検出し、二次堆積状況が確認できる。

3月19日（木）　第1トレンチ掘り下げ、南側の落ち込みは深くなりそうであるが、北側での落ち込みの肩は検出されず。第2トレンチ掘り下げ、X－28区側へ傾斜を見る。地表面下約1mで黒色土（黒ニガ）に達し、その間混土が互層となり、上位は削平されているものの黒色土の上に盛土され土塁を構築している。X－29区では、盛土の下部付近にレンガ片や針金等を認め、屋内運動場建設時において土塁に幅2mの土を継ぎ足していることが観察できる。午後は雨のため作業を中止し、資料収集を行う。

3月20日（金）　第1トレンチ掘り下げ。北側（Z－30区）の落ち込みを検出し、堀を確認する。堀の上幅約8mを計測する。第2トレンチ掘り下げ。土塁の裾部において堀の落ち込みを検出し、屋内運動場の基礎等のために深掘りはできず。第1トレンチは、トレンチが深くなったため周辺に防護フェンス設置する。

3月23日（月）　雨のため現地での作業を中止する。

3月24日（火）　第1トレンチの堀部分の掘り下げ。地表下5．2mで堀の下部を検出したが、土壌の含水率が高く崩壊の恐れのため掘り下げを中断する。遺構平板実測。

3月25日（水）　第2トレンチ堀部分掘り下げ。トレンチ土層断面実測。城内の地形測量のために竹や雑木類の伐採作業。地形測量。

3月26日（木）　第2トレンチ遺構検出部分平板実測。堀部分を残し埋めもどし作業。第1トレンチは埋めもどし。

3月27日（金）　第2トレンチ掘部分の土層断面実測作業。第1・第2トレンチともに埋めもどし。本日で確認調査を終了する。

二次調査

7月13日（月）　調査開始。作業員に対して調査の主旨及び作業上の留意事項について説明を行う。テント設営。発掘器材・器具等搬入。地形平板実測を実施。グリッド設定を実施（10m×10m）する。土塁上部は削平を受けており、大きい樹木は残し、小さい樹木や工作物等についての除去作業。一次調査時での第2トレンチについて掘り下げ。

7月14日（火）　第2トレンチ掘り下げ。樹木及び工作物除去。Y－28・29区土塁跡について表土より掘り下げ、土塁上部が削平されているためアカホヤやシラス等の混土層を確認する。Y－28区南側では運動場側へ大きく傾斜を呈し、基盤層はアカホヤや暗黒褐色粘質土となる。

7月15日（水）　Y－28・29区土塁跡表土掘り下げ、果木のため撹乱を受け、さらに第4トレンチを設定し、表土より掘り下げる。表土下は混土の互層をなし、土塁残存部の痕跡を確認する（幅6.5m）。

7月16日（木）　雨天のために現場作業を中止し、雨対策を実施する。

7月17日（金）　雨天のために現場作業を中止する。雨対策を実施する。

7月20日（月）　W－28・29区に第3トレンチを設定し、表土より掘り下げる。土塁残存部の痕跡を確認する（幅7.5 m）。Y－28・Z－28・29区掘り下げ、表土下にはアカホヤ層を確認し、Y－28・Z－28区南側のアカホヤの下位層より縄文時代早期の遺物包含層を確認する。

7月21日（火）　W－28・29区の第3トレンチ掘り下げ。X－28・29区表土より掘り下げ、表土下にはシラス、黒色土、アカホヤ等の混土による互層を認める。第2トレンチでは、土塁残存部の痕跡を確認し（幅7.0m）、土塁の基盤 層は黒色土（黒ニガ）となり、下位層は西側へ傾斜をもつ。

7月22日（水）　W－28・29区の第3トレンチ掘り下げ、基盤層である黒色土は大部分が残存する。W－28区南側部分は黒色土をかなり削平し、客土のためか混土の互層呈する。X－28・29区掘り下げ、混土の互層を認め、土塁の残存部を確認する。土塁と運動場とのコンクリート擁壁解体作業。

7月23日（木）　W・X・Z－28区の南側部分の掘り下げ及びコンクリート塊除去作業。運動場や城造成の時期が不明であるが大幅な削平を受けている。Y・X－29区堀部分については表土より掘り下げ、特に、屋内運動場建設の時期に約2m程の土が貼り付けられているために、その部分の除去作業。

7月24日（金）　Y・X－29区の空堀側部分について盛土の空堀側部分の客土及び室内運動場設除去後シラス等投入後の造成土の除去作業。

7月27日（月）　Y・X－29区の空堀側部分について盛土除後精査作業を繰り返す。堀の肩（掘り込み部分）を検出する。X－29・30区の堀部掘り下げを行う。

7月28日（火）　Y－29区の空堀側部分の客土の除去後精査作業を繰り返し、空堀部の掘り下げ。空堀上部は学校敷地造成時に大幅な削平を受け、その後客土造成を実施し、その下位は、アカホヤ・黒色土・シラス（二次シラス含）・暗黒褐色粘質土等がそれぞれブロック状ないし混土となり縦位や横位に観察されあざやかな色彩を創りだしている。枠足場を設定し、セクションのための線引きを実施する。

7月29日（水）　Y－29・30区の空堀部分掘り下げ及び空堀埋土状況土層断面実測。空堀の底

付近は、シラス（二次シラス含）・暗黒褐色粘質土・砂等がそれぞれブロック状ないし混土状となり斜位に観察できる。

7月30日（木）　Y－29・30区の空堀部分掘り下げ及び空堀埋土状況土層断面実測。遺構検出状況平板実測実施。X－29・30区の空堀部分掘り下げ作業を進める。

7月31日（金）　Z・X－29・30区の空堀部分掘り下げ。埋土状況は、さほどの変化は認められないが、中位から上部は灰黒褐色粘質土を人為的に埋土した状況が観察できる。Y－29・30区の空堀埋土状況土層断面実測。遺構検出状況平板実測。

8月3日（月）　Z・X－29・30区の空堀部分掘り下げ後精査作業。Z－29・30区埋土堆積状況実測準備のための枠足場設定作業実施後埋土堆積状況土層断面図実測。遺構検出状況平板及びコンター実測作業。

8月4日（火）　Z・X－29・30区の空堀部分精査作業。Z－29・30区埋土堆積状況土層断面実測。遺構検出状況平板及びコンター実測作業。Y－28・29区トレンチにおいて縄文時代遺物包含層確認調査実施。全遺構について精査作業後写真撮影Y－29区溝状遺構掘り下げ。空堀よりその一部が削平を受け、空堀以前の遺構が考えられる。

8月5日（水）　Y－29区溝状遺構掘り下げ後平面・断面・コンター実測。遺構検出状況平板及びコンター実測。X・Y－29区空堀の肩部分に柱穴を検出し、掘り下げ後平面・断面実施。この柱穴は、城外へ斜位に掘り込みが観察できる。

8月6日（木）　空堀部分底面平板及びコンター実測。Y－29区溝状遺構及び空堀底面精査作業部分後写真撮影。X・Y・Z－28・29区縄文時代早期文化層上位までの排土作業。Y－29区土層断面実測（アカホヤ層からシラスまで）。

8月7日（金）　X・Y・Z－28・29区縄文時代早期文化層上位まで排土作業及びグリッド杭打ち直し作業。縄文時代早期文化層掘り下げ、さらに下位を確認するために2×15mのトレンチを設定し、掘り下げ。遺物・遺構ともに検出されず。

8月8日（土）　W・X・Y・Z－28・29区縄文時代早期文化層掘り下げ。W－29区集石を検出したもののまとまりがあまり認められない。掘り下げ後写真撮影・実測。X－28・29区縄文時代早期文化層遺物出土状況写真撮影・平板実測。遺物取り上げ。

8月9日（日）　W・X・Y・Z－28・29区縄文時代早期文化層下の確認調査実施。土層断面実測。全ての調査を終了する。テント解体作業。発掘道具等の搬出作業。

なお、調査後の整理作業は、県教育庁文化課埋蔵文化財重富収蔵庫において、昭和62年9月1日から開始し、水洗い、注記、復元、実測、図版、レイアウトなどの作業を順次、これを実施し、昭和63年3月31日までに終了したが、本年度は、原稿作成および印刷製本のみである。

第２章　遺跡の位置及び周辺遺跡

第１節　遺跡の位置

志布志町は、鹿児島県の最東部で、大隅半島の東海岸、曽於郡の最南端、志布志湾の湾奥部に位置し、行政区画でみれば、北東側から東側へは宮崎県都城市および串間市と県境をなし、北西部から西側へは末吉町、松山町、有明町とにそれぞれ相接している。

本町の地形を概観すれば、北西部の御在所岳（標高530m）を最高峰に、志布志湾に向かってゆるやかに傾斜し、海岸近くで急崖となりわずかな沖積平野を経て海岸線となる。この志布志湾に南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで約10kmの長さを測り、西側は砂丘海岸が続くのに比し、東海岸は、日南層群で構成される岩礁海岸となり、幅約１kmの細長い平野部を経て背後は、約40m比高差をもつ海食崖となるシラス台地で、内陸部に向かって約24kmの､釣鐘状の地形を呈している。

内陸部は、北部から東部にかけてが山岳地帯である。この山岳地帯は、主に日南層群よりなる南那珂山系の西端地域で、このより西側へ広がる広大なシラス台地となる。
この広大なシラス台地には、この山系より派生する残丘山地が北東側より南西側方向に散発的にしかも小起状となって延びている。シラス台地は、南流する前川や安楽川などの大小の河川によって形成された侵食作用によって樹枝状にのびる谷頭侵食で細かく刻まれ、大小で狭長な台地となっている。

このようなシラス台地を南流し志布志湾へ流入する延長約15kmを測る前川が本町の東側にあり、西側には延長約24kmを測る安楽川があり、他に、北東山間部の四浦地区には大矢取川が宮崎県串間市を経て志布志湾へ流入している。

このような地形のために、町内に分布する約170か所の遺跡の多くは、山陵に付随するそれぞれの山麓台地上、あるいはその周縁部に位置している。

これらの遺跡のうちのひとつである新城跡は、海岸より狭長な沖積平野を経て、この沖積平野に相接する約40mの海食崖上のシラス台地縁辺部にあり、特異な景観を呈するところで、現在志布志中学校運動場のある台地南端で、寺内（時宗・海徳寺跡）の裏山にあたるところである。この台地縁辺部は、東・西・南側の三方を断崖に囲まれ、その頂上で北側がわずかに台地とに接している。この地形は、志布志湾へ突出したような自然の要塞としての環境にあり、現在、中学校屋内運動場が、その一部となっている。この城の西側浸食谷と関谷の東西からは、侵食谷が最も入りこんで地峡となっていた所に、高さ５m・幅10mの土塁が構築された痕跡があり、今は東西の隅にその面影を残しているのみである。

この新城は、有事の時の外郭の砦であり、西側は深い侵食谷を志布志の市街地から松山・大隅町岩川へ通ずる県道が走り、関谷方面の守りと西側への備えとして築かれたものと考えられる。

この新城を含め、他に松尾城・内城・高城で構成されたものが志布志城と呼ばれている。

第２節　周辺遺跡

本町は、山・川・海と自然条件に恵まれているために、遺跡は他の地域に比較すると圧倒的に多く、旧石器時代から古墳時代へと満偏なく続くなかで、特に縄文時代の遺跡の多い地方である。これらの遺跡も個人による諸開発や土地改良事業等による消失もないではない。近年は、大型諸開発事業に伴う発掘調査数を増し新たな知見も多い。

本町の埋蔵文化財は、町の東西を南流しながら志布志湾へ流入する前川や安楽川の二河川の水系流域を中心に、遺跡の分布がこれまで報告され、昭和60年本教育委員会発行の「志布志町の埋蔵文化財」によると、先史時代の遺跡は159ケ所にのぼり、縄文時代の遺跡がほとんどである。その大部分の遺跡のうち、いくらかの遺跡についてその概要を見てみたい。

片野洞穴遺跡は、大字内之倉片野に所在し、昭和39年に町誌編さん事業の一環として発掘調査された水蝕洞穴遺跡で、前川の支流、中川内川が山間部から中川内集落のある谷底平野にさしかかった所で、標高約100mを数える。調査 は、洞穴の南壁面に沿った一帯で、入口から長さ６m幅4.3mのトレンチ調査の結果、遺構は敷石住居跡や配石遺構などが検出され、遺物としては、土器、石器、骨角器、貝殻、獣骨類などが出土している。土器は轟式土器・曽畑式土器、岩崎式土器、市来式土器、西平式土器や弥生式土器などが出土し、石器は３点と少なく、獣骨も多く、猪・鹿を中心に多種類がありツキノワグマの骨やサメなどの歯等も出土している。なかでも獣骨製のカンザシや牙製の釣針は貴重なものである。また、貝類は相当量が出土し、淡水産１：海水産９の割合であったとの報告がなされている。

東黒土田遺跡は、前川の上流にある八郎ヶ野集落から県道111号線をさらに500mほど東側に進んだ宮崎県との境界に近い標高約160mを数え八郎ケ野の台地上にあり、昭和55年に発掘調査された。その結果、舟形石組遺構や貯蔵穴など 遺構の検出があり、隆帯文土器、匙形石器、石斧、敲石などの出土遺物があった。この貯蔵穴より落葉性のクエルカスと思われる木の実が出土し、放射性炭素測定の結果、この木の実11300±130年の測定値が提示され、国内最古であると報告されている。

倉園Ｂ遺跡は、前川の上流約12kmの北岸の倉園台地上にあり、最高部の標高は約120mを数え、県営特殊農地保全整 備事業に伴う調査で、昭和57･58年に発掘調査が実施されている。遺構は住居跡、土壙、集石遺構、配石遺構などが検出され、土器は石坂式土器、吉田式土器、前平式土器などや石器としては磨石、石鏃、剥片石器が出土している。なかでも連結土壙や剥片石器の出土は、今後の縄文時代早期の解明に貴重な資料であると報告されている。

鎌石橋遺跡は、前川の中流域の、県道111号線を立花迫集落で分岐し、鎌石・二反野方面に通ずる鎌石橋を渡り西側一帯の河岸段丘上にあり、前川の河面より約５mを数える。昭和56年に発掘調査された結果、炉跡や石組遺構などが検出され、隆帯文土器、前平式土器、塞ノ神式土器、曽畑式土器などの土器、細石刃、細石核、剥片石器、磨製石斧、局部磨製石斧などの石器が出土していた。特に、隆帯文土器の出土は東黒土田遺跡と同様に出土例が少なく、今後の草創期の究明に重要な遺跡である。

柳井谷遺跡は、帖柳井谷の盆地状地形内の山麓の緩やかな傾斜と平坦面をもった舌状台地内

で、柳井谷集落の東側にあたり、標高約100～110mを数える。昭和58年の発掘調査の結果、土器は岩崎下層式土器、岩崎上層式土器、指宿式土器、市来式土器、草野式土器、黒川式土器などの出土があり、完形品も多い。石器としては打製石斧、小型ノミ状石斧、抉状耳飾りなど多く出土した。

野久尾遺跡は、前川の上流約1㎞辺りに野久尾橋がかかり、その野久尾橋は大性院集落と別府台地や外之牧台地をつなぐ橋で、その橋のかかる台地の鞍部にある。昭和52・53年に発掘調査が行われ、撚糸文土器、轟式土器、春日式土器、指宿式土器、市来式土器、黒川式土器、土師器、須恵器などの土器が出土したが、約5､000点の出土遺物のうちその80％は轟式土器で、石器としては剥片石器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、有孔石製品が出土している。この遺跡では、大半が轟式土器の出土でこの土器形式の究明には極めて重要な好資料といえよう。

別府（石踊）遺跡は、市街地より東へ2㎞の益倉集落へ通ずる石踊台地にあり、昭和51・52年に発掘調査が行われ、土器としては石坂式土器、吉田式土器、塞ノ神式土器、轟式土器、曽畑式土器、岩崎式土器、縄文時代晩期に比定される赤色顔料による彩色の黒色研磨土器や、網目や蓆目等の組織痕文土器があり、石鏃、磨製石斧、打製石斧、石匙、磨石、凹石、石錘、異形石器、スクレーパーなどの石器の他、土製品などの遺物が出土している。

山ノ上遺跡は、別府（石踊）遺跡に近距離にあり、昭和43年に町誌編さんの一環事業で発掘調査が実施され、石坂式系土器、塞ノ神式土器などの土器や石核や剥片などの石器が出土している。

小渕遺跡は、志布志小学校に隣接する若宮神社北裏側の伊地知氏宅内にある。このへんは中世に築城された志布志城の主郭へ通ずる小渕口にあたるとされている。昭和42年に発掘調査が行われている。遺構としては、山城当時のものと考えられる石を敷き詰めた側溝、階段状に土留め石を並べた通路跡なども検出され、市来式土器、指宿式土器、岩崎上層式土器、岩崎下層式土器などの土器や磨製石斧、打製石斧、石錘、石皿、凹石などの石器が出土している。

宮前遺跡は、志布志町内で最も東北の端部の四浦地区にあり、本町に所在する遺跡では最も高所に位置する遺跡である。遺跡の所存する宮前台地は、周縁に向かって角度の強い傾斜面を持つものの、上面に僅かな平坦面をもっている環境にある。昭和39年の町誌編さん事業の資料収集のおり発見され、昭和48年に発掘調査が実施されている。その結果、縄文時代の住居跡が検出され、前平式土器、岩崎上層式土器、岩崎下層式土器、指宿式土器などの土器や石鏃、磨石、石皿、礫器、石核、剥片などの石器が出土している。

曲瀬（中原）遺跡は、安楽曲瀬の安楽川と小瀬川に挟まれた舌状台地の先端に近い県道志布志一牧ノ原線沿いの傾斜面にあり、昭和59年に発掘調査が実施されている。土器は、縄文時代中期終末から後期初頭にかけての遺物がほとんどで、南福寺下層式土器や阿高系の類似土器、磨消縄文土器、擬似縄文土器、指宿式土器などが多量に出土し、特に、磨消縄文系土器で、瀬戸内地方の福田KⅡ式の完形に近い土器は、この時期における文化の伝播や交流を考える上で貴重な資料である。そのほか、石器としては、大型磨製石斧、小型ノミ状石斧、石錘などが多数に出土し、石錘については400個を数える量で、発掘調査による出土例は県内でも余りみら

れず特筆される。土器の破片を利用した1,000個を超える土製加工品のメンコの出土や、勾玉や性器を模した軽石加工品、土器の器面調整に使用したと考えられる軽石整調整具など、このように貴重な資料を提供してくれた遺跡である。

弥生時代の遺跡は、8ケ所の報告があるが、その実態についてはあまり判明していない。しかし、古墳時代の志布志湾沿岸の隆盛を考えると弥生時代の定着は当然考えられ、縄文時代に比し極端に少ないが、今後多くの遺跡の発見の可能性は高いといえるが、これまでの遺跡の発掘例をみると弥生時代の遺物包含層は、土地改良事業や耕作などにより消失しているケースが多く見られている。

夏井海岸遺跡は、有肩石斧、扁平打製石斧、敲石、石錘、などの石器類が出土している。横尾下遺跡では、弥生時代中期の甕形土器が出土し、周辺より有肩石斧なども発見され、柳遺跡では、遺構として竪穴住居跡や甕形土器や壺形土器などの遺物が出土している。

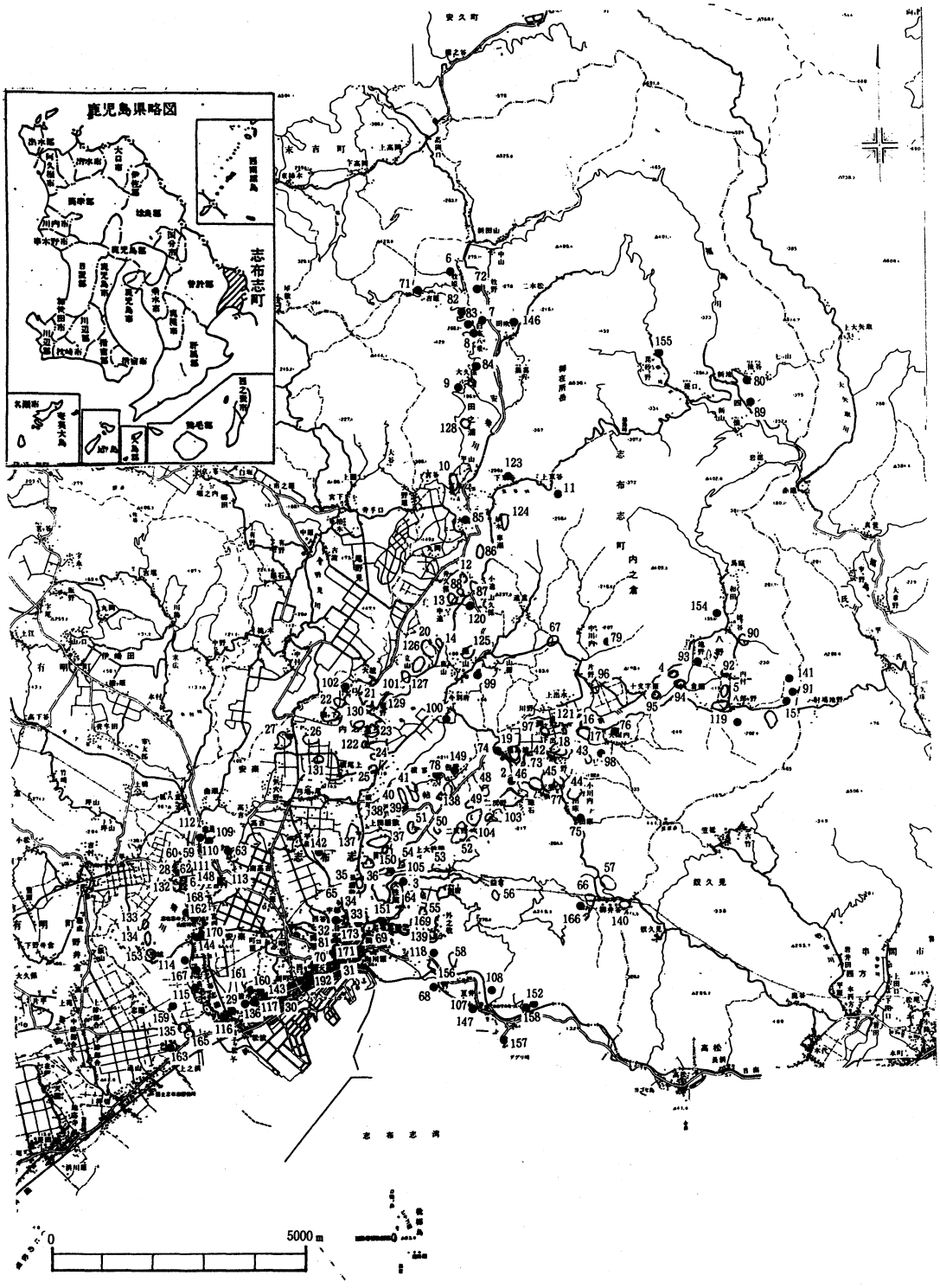
古墳時代では、本県最古の高塚古墳といわれる飯盛山古墳が所在していることは置かれた地理的位置と、肥沃な肝付平野をひかえた自然条件により高塚古墳を受容する環境にあったといえよう。この他に小牧1号古墳、六月坂土壙などが発見されている。

飯盛山古墳は、本町東側に位置する夏井のダグリ岬にあり、このダグリ岬の頂上は約50mを数え、その頂上に位置している。この古墳は、昭和38年の国民宿舎ダグリ荘の建設事業により破壊されたが、当時の地形測量図より復元すれば、古墳の前方部の低い古式の前方後円墳で、全長約80m、前方部の長さ43m、幅20m、高さ1.5m、後円部の長さ37m、幅30m、高さ4.5mの規模で、周囲を高さ約1mの葺石と思われる玉石でめぐらされていたといわれ、内部構造は竪穴式石室であったようで、壺形埴輪、ガラス製勾玉、丸玉、小玉などの遺物が出土し、この古墳は5世紀時代のものとされている。

小牧1号古墳は、本町の西端の安楽川の上流約1㎞の台地先端部の小牧台地の標高約51mの最頂部に所在している。この古墳は、昭和57年の工業用地の整備事業の工事中に発見され、全長30m、最大幅20m、高さ約1.5mの前方後円墳といわれている。墳丘上には、葺石の一部が確認され、須恵器の破片が発見されている。この須恵器片よりこの古墳は6世紀前半代といわれている。

このほかに、町誌によれば、六月坂土壙とよばれる横穴がある。昭和39年の町誌編さんの折り確認され、この横穴から出土した須恵器から古墳時代後期から奈良時代にかけてのものといわれている。

以上、主に発掘調査が実施されたうちの比較的最近の発掘調査例をもって、本町の先史時代を概観した。



第1図　新城跡の位置と周辺遺跡

表1　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	遺物等
1	東黒土田B	旧石器 縄	隆帯文土器　平栫式　塞之神式　入来式　快入石斧　匙形石器　舟形石組炭化物
2	鎌石橋	旧石器 縄	細石刃　細石核　ナイフ形石器　隆帯文土器　前平式　塞之神式　曽畑式　剥片石器
3	山之上	旧石器 縄	剥片石器　石核　塞之神式　石坂式
4	倉園B	旧石器 縄	細石刃　石坂式　吉田式　前平式　石鏃
5	八郎ケ野A	旧石器 縄（晩）	台形石器　打製石斧　石鏃　炭化物
6	牧原	縄	轟式　住居跡
7	内門	〃	
8	白木原	〃	押型文土器
9	大長野	〃	押型文土器
10	宮谷口	〃	
11	本村	〃	
12	小牧	〃	
13	蔵園	〃	打製　磨製　局部磨製石斧　大石系土器　無文土器　敲石　棒状槌石
14	中迫	〃	
15	東黒土田	〃	
16	土光A	〃	
17	土光B	〃	
18	上原	〃	吉田式　炉址
19	中須	〃	
20	西中畑	〃	
21	樽野	〃	石皿　黒曜石片　磨石夜臼系　市来式　石鏃　チャート剥片
22	下原A	〃	焼石
23	長尾	縄・弥	吉田式　有肩石斧
24	横尾A	〃	
25	横尾B	〃	
26	蓑輪	縄（早） 弥（中）	吉田式　山之口式　チャート黒曜石　石鏃
27	柳	〃	住居址　集石　軽石製品　弥生土器　押文文　撚糸文石坂式　吉田式
28	上重	〃	打製石斧　磨石　敲石
29	別府	縄（早） 弥（中）	
30	大西	〃	
31	向川原	〃	
32	野首A	縄・弥	
33	野首B	縄	
34	西中尾	〃	
35	油田	縄・弥	
36	堂迫	縄・弥	打製石斧
37	下牧	縄・弥	
38	白木牟田	縄・弥	
39	上牧	縄	
40	中原	縄	磨石
41	井手元	縄	
42	出口	縄・弥	双角石器
43	東原	縄	
44	堂ノ下	縄（後）	石皿　磨石　指宿式　市来式　草野式　打製石斧
45	家野	縄（後）	石皿　磨石　敲石　黒曜石　指宿式　市来式　草野式　打製石斧
46	松崎	縄（後）	石皿　磨石　敲石　黒曜石　指宿式　市来式　打製石斧
47	西原	縄	
48	牧	縄・弥	
49	下平	縄	
50	下迫	縄	
51	下佐野原	縄	
52	大二反野	縄・弥	
53	下田	縄	
54	八反田	縄・弥	前平式　弥生土器
55	柳元	縄・弥	
56	前谷	縄	
57	柳ノ下	〃	抉状耳飾り　打製石斧　草野式　市来式　指宿式　岩崎上下層式
58	深迫	縄・弥	

表2　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	遺物等
59	上門A	縄	御領式　打製石斧　石皿　磨石　敲石
60	〃 B	〃	御領式　打製石斧　磨石　黒曜石片
61	〃 C	〃	御領式　打製石斧
62	〃 D	〃	〃
63	大迫	〃	塞之神式　阿高式　出水式　石斧　石錘
64	石踊	縄	集石遺構　網目文　目文　塞之神式　吉田式　石坂式
65	野首	縄・弥	市来式 西平式 打製石斧
66	柳井谷	〃	出水式　轟式　押型文　御領式　石斧
67	道重	〃	塞之神式　無文土器　打製石斧　押型文　阿高式
68	ミゾレ谷	〃	完形土器
69	下牧	縄・弥	弥生土器　阿高式　石斧
70	ウドン上	縄	阿高式
71	吉原	〃	轟式　石斧
72	牧野	〃	石斧　押型文　指宿式　土隅紡　車
73	出口	〃	塞之神式 轟式 磨製石斧
74	立花迫	〃	南福寺式　石坂系土器　無文土器　打製石斧
75	田床	〃	阿高式　南福寺式　御領式　注口土器
76	風穴	〃	出水式 指宿式 有肩石斧
77	天堤	〃	並木式　阿高式　押型式　御領式　市来式　指宿式　局部磨製石斧　石皿
78	横峯	縄・弥	形式不明　弥生土器　打製石斧
79	片野洞穴	〃	西平式　弥生土器　骨角器　獣骨　轟式　曽畑式　岩崎上下層式　市来式
80	後谷	〃	
81	小渕	縄	打製石斧　磨製石斧　石錘　石皿　市来式　指宿式 草野式 岩崎上下層式
82	倉野	〃	轟式　塞之神式　条痕文土器 黒曜石 山形押型文　網目文 吉田式 前平式
83	板山	〃	円押型文土器
84	白木八重	〃	〃
85	大越	縄・弥	弥生土器　吉田式　前平式　石坂式　石皿
86	小牧	縄	岩崎上下層式　石斧
87	小迫	縄・弥	打製石斧　弥生土器　磨製石斧
88	山久保B	縄	磨製石斧　吉田式　住居址　大石式
89	宮前	〃	石皿　磨石　石核　剥片　前平式　岩崎上下層式　指宿式　石鏃
90	姥ケ野	〃	磨石　石鏃　条痕文　轟式　曽畑式　無文土器　打製石斧
91	東黒土田C	〃	御領式
92	井手平	〃	平栫式　塞之神式　前平式　吉田式
93	池野	〃	春日式　石核
94	倉園A	〃	磨製石斧　敲石　岩崎上下層式　指宿式　鐘ケ崎式　石皿
95	十文字	〃	磨石　敲石　石錘　打製石斧　岩崎上下層式　指宿式　石鏃　石皿
96	浜場	〃	吉田式　無文土器
97	出水	〃	円押型文土器
98	平原	〃	石坂式
99	山据	〃	打製石斧　大石系土器　布痕土器　蓆痕土器
100	今別府	〃	打製石斧　磨石　大石式　黒川式　布痕土器　蓆痕土器
101	上樽野	〃	指宿式
102	橋之口	〃	大石系土器
103	鎌石	〃	吉田式　蓆痕土器　打製石斧
104	二反野	〃	夜臼系　敲石　磨石　黒曜石
105	坂之上	〃	石錘　前平式　石鏃　打製石斧　黒曜石
106	野久尾	〃	沈線文　土師器　石鏃　石ヒ　石斧　撚糸文土器　轟式　春日式　指宿式
107	夏井	〃	打製　磨製　局部磨製石斧　石錘　御領式　三万田式 大石系 石鏃　石ヒ
108	上園	〃	塞之神式B
109	曲瀬	縄・弥	市来式　指宿式　弥生土器　有舌尖頭器
110	小瀬A	縄	市来式　黒曜石　打製石斧　磨製石斧
111	小瀬B	縄・弥	指宿式　市来式　弥生土器　打製石斧
112	中原	〃	石錘　ノミ状石斧　軽石製品　鐘ケ崎系　指宿式　磨石　敲石　石皿

表3　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	遺物等
113	百堂穴	縄	轟式　磨製石斧　獣骨
114	宮脇	〃	石皿　石鐘　敲石　磨石 指宿式　市来式　草野式 黒川式系
115	安良	〃	大石系 打製石斧 土師器 市来式
116	鳥井下	〃	吉田式 石坂式 無文土器
117	船磯	〃	轟式
118	前之段	〃	網目文　蓆痕土器　敲石 磨石
119	八郎ケ野B	〃	無文土器　打製石斧　磨 製石斧
120	山久保A	〃	
121	上出水	〃	住居址 石坂式　吉田式　磨石 打製石斧
122	樽ノ口	〃	吉田式　指宿式 打製蓆製　石斧
123	宮ケ中	弥	
124	下原	〃	
125	森山	〃	
126	平原A	〃	
127	平原B	〃	
128	平山	〃	
129	上原	弥（中）	山ノ口土器
130	下原B	弥	
131	札建	〃	
132	四反田	〃	
133	高牧	〃	
134	二重堀	〃	
135	権現原	〃	
136	水ケ迫	〃	土師器
137	島廻	〃	
138	上佐野原	〃	
139	下原	〃	土師器
140	山下	弥（中）	高杯
141	東黒土田A	弥	
142	毛穴野	〃	
143	六月坂	〃	土師器　須恵器
144	宮之馬場	弥	土師器　須恵器
145	道税	〃	
146	田吹野	〃	
147	夏井	〃	
148	高吉	〃	
149	佐野	〃	
150	上田屋敷	弥（中）	山ノ口式土器 打製有肩石斧
151	外ノ牧A	弥	
152	打出ケ浜	〃	
153	平城跡	〃	打製石斧
154	和田	〃	
155	畏砂ケ野	〃	
156	溝江	〃	
157	飯盛山古墳	古墳	ガラス製丸玉2個　ガラス製小玉2個　壺形埴輪 ガラス製勾玉1個
158	夏井古墳	〃	小石で固めた石 男女三人の重葬
159	小牧1号古墳	〃	土師器　須恵器　軽石加工品
160	六月坂土	飛鳥	須恵器
161	水ケ迫土	奈良	土師器（骨壺）
162	山宮土	平安	製鏡　直刀　骨壺
163	一丁田		土師器　須恵器
164	枇榔島		土師器　須恵器
165	桜山		土師器
166	市坂		須恵器
167	頴姓郷		土師器　須恵器
168	向江		土師器
169	外ノ牧B		土師器
170	志布志城跡	鎌倉	山城
171	松尾城跡	南北朝	山城
172	高城跡		山城
173	安楽城跡	鎌倉	山城

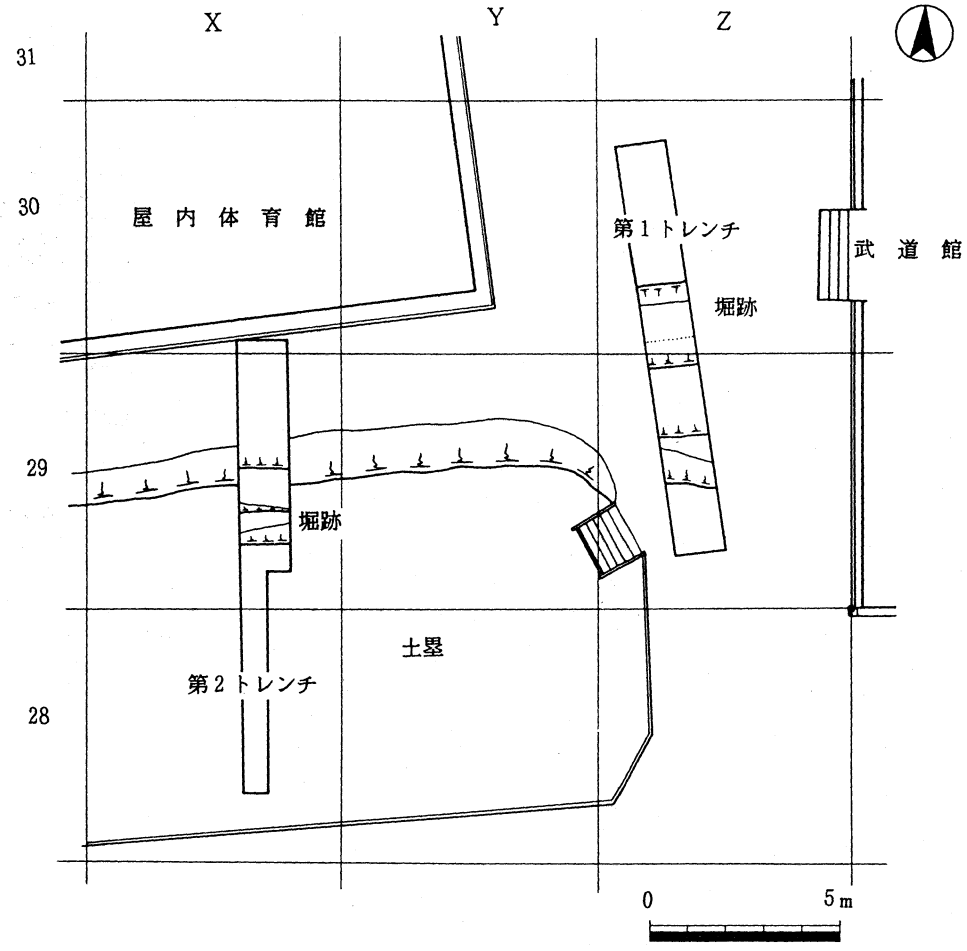
第３章　調査の概要

第１節　確認調査の概要

発掘調査は、中学校屋内運動場が不適確建物のために、現屋内運動場を取り壊し、拡張して建築するというもので、この屋内運動場に隣接して土塁跡が上部を削平された状態で現存しているために、土塁の残存状況及び空堀の所在について主眼を置いて実施した。

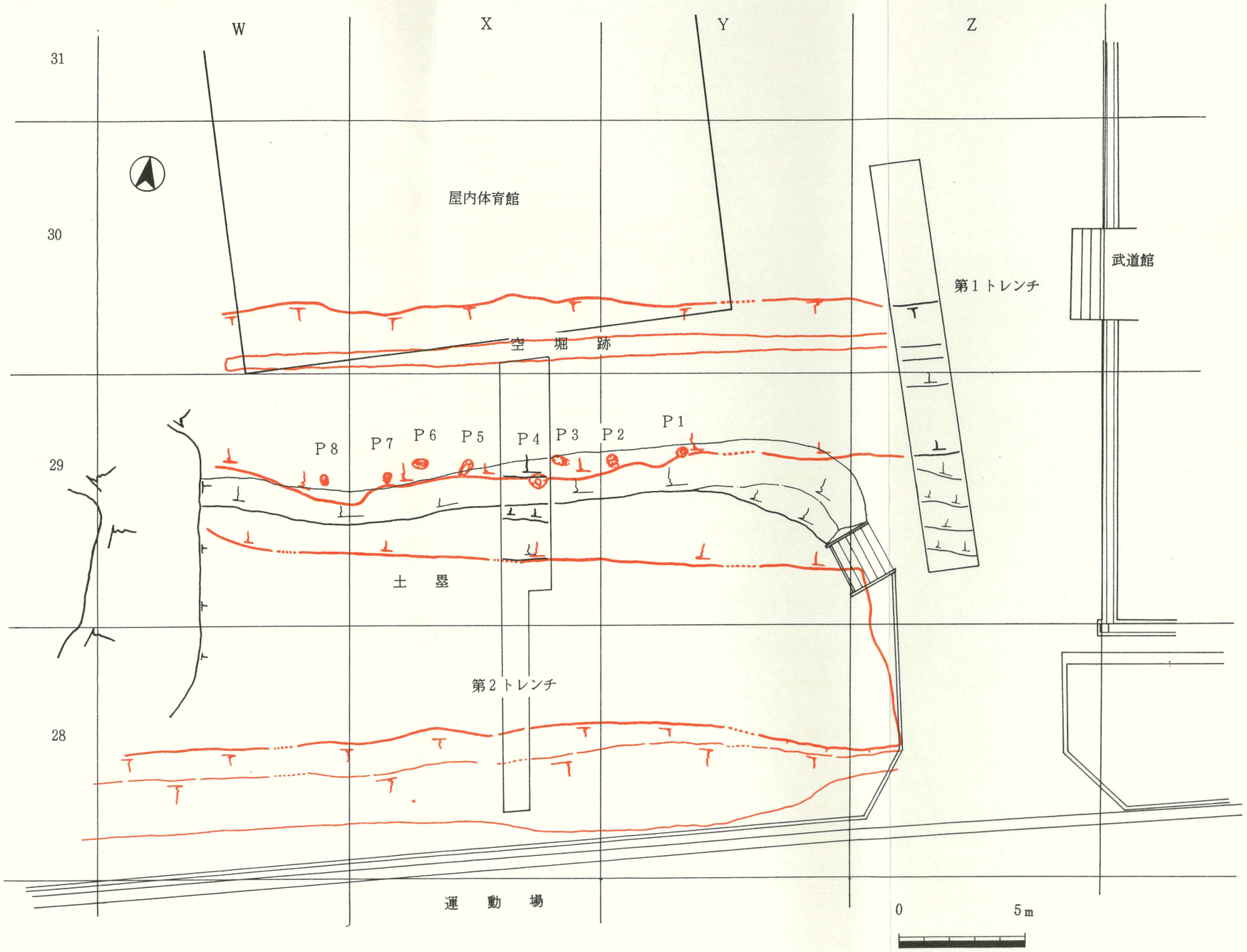
調査は、対象地域が中学校敷地内にあり、武道館や屋内運動場が建っているため思うようにトレンチを設定することはできなかった。トレンチは、堀の確認のために２ｍ×16.5ｍを第１トレンチとし、土塁と堀とのつながりの確認のために２ｍ×18ｍを第２トレンチの２ケ所を設定して実施した。

第１トレンチ（Ｚ－20区）は、屋内運動場と武道館との間の現運動場への通路となっている部分で、現屋内運動場側に設定した。この部分は通路となっているために、土塁が削平を受けており、表土は非常に硬くしまっている。また、昭和初期からごく最近までの間に何回か埋め

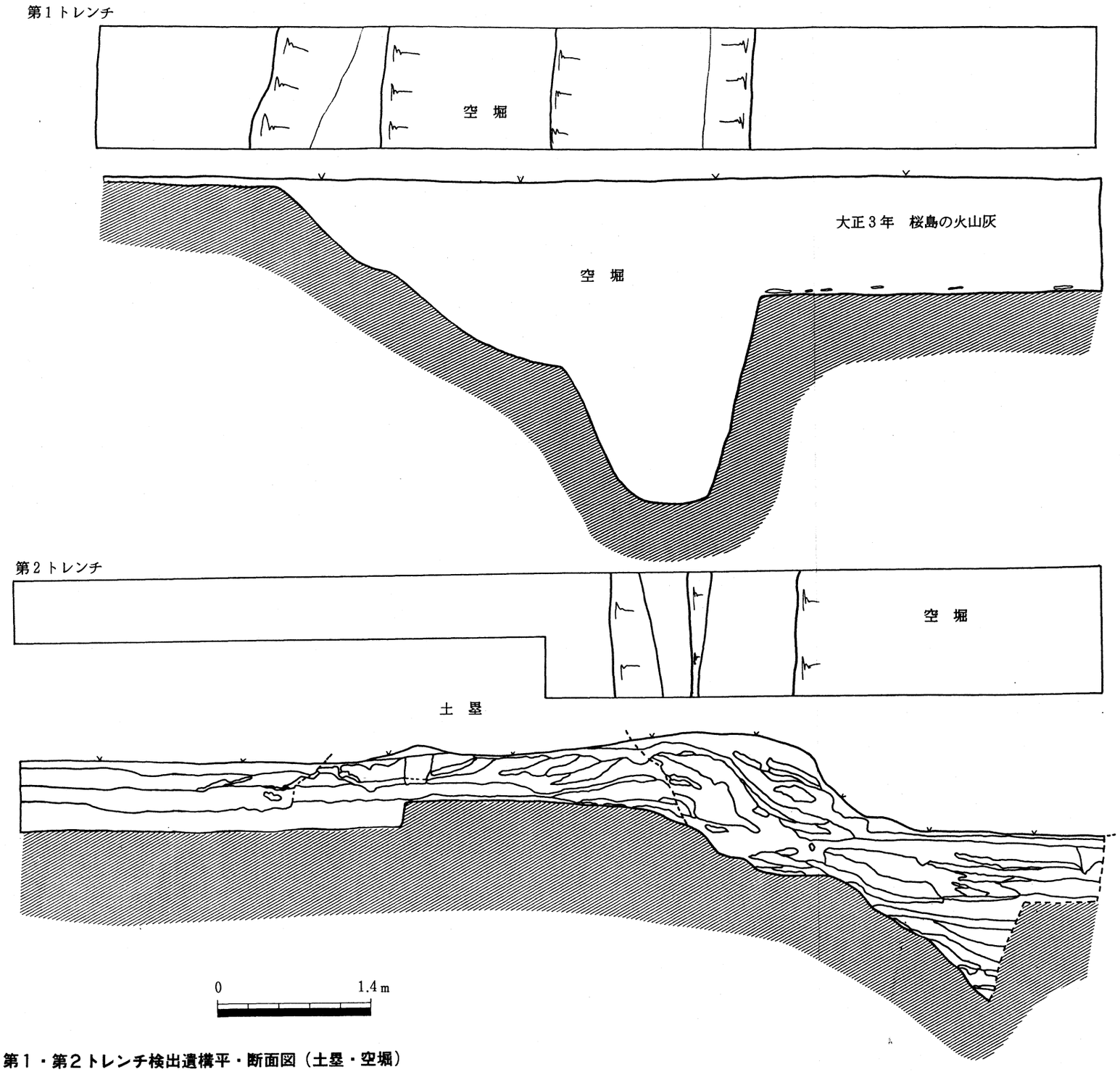


第２図　確認調査トレンチ配置図

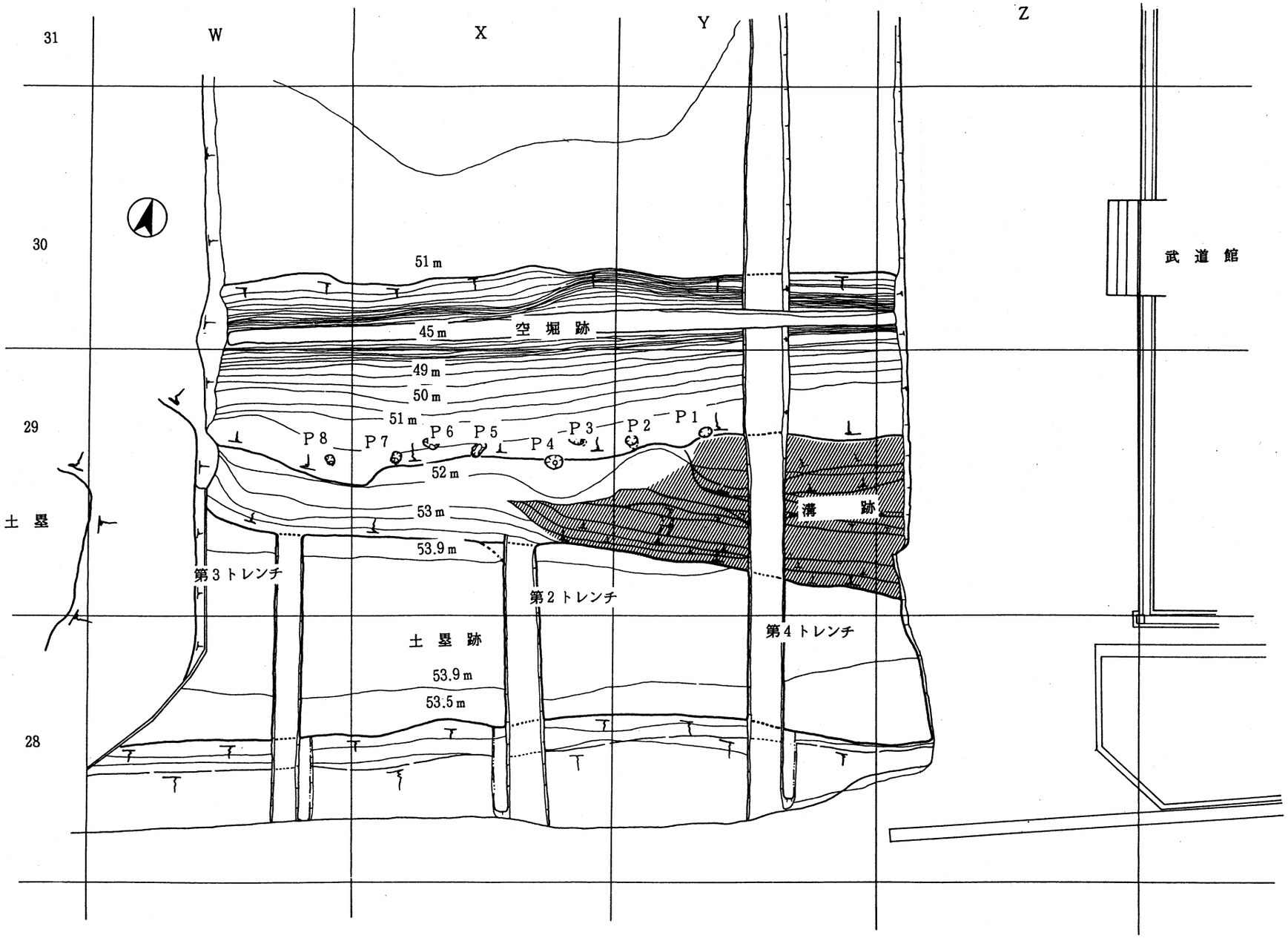
第３図　新城跡調査位置及び周辺地形



第４図　土塁跡・空堀跡及び確認調査トレンチ位置図



第5図　第1・第2トレンチ検出遺構平・断面図（土塁・空堀）



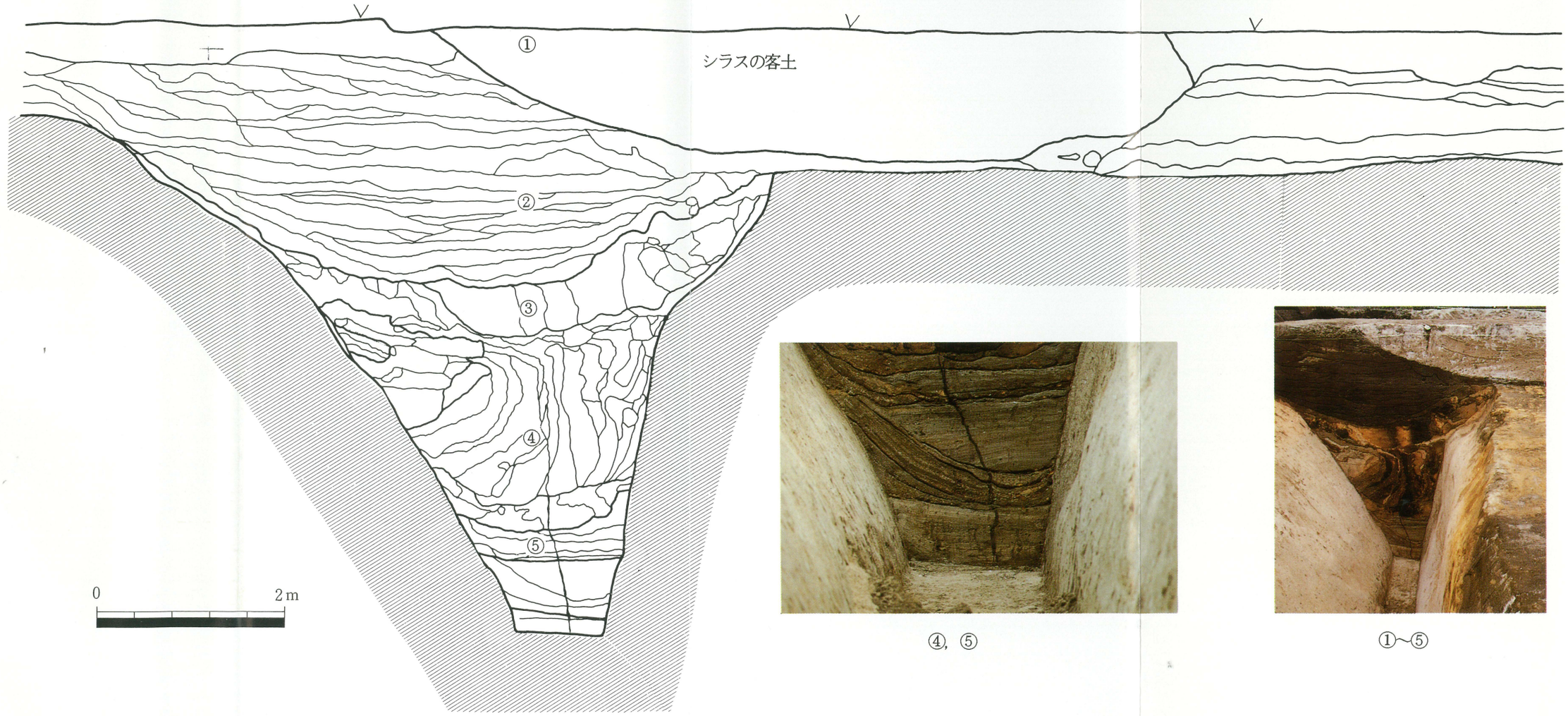
0 5m

第6図　土塁跡・空堀跡・溝跡検出状況平面図

①～⑤

③，④

②～⑤

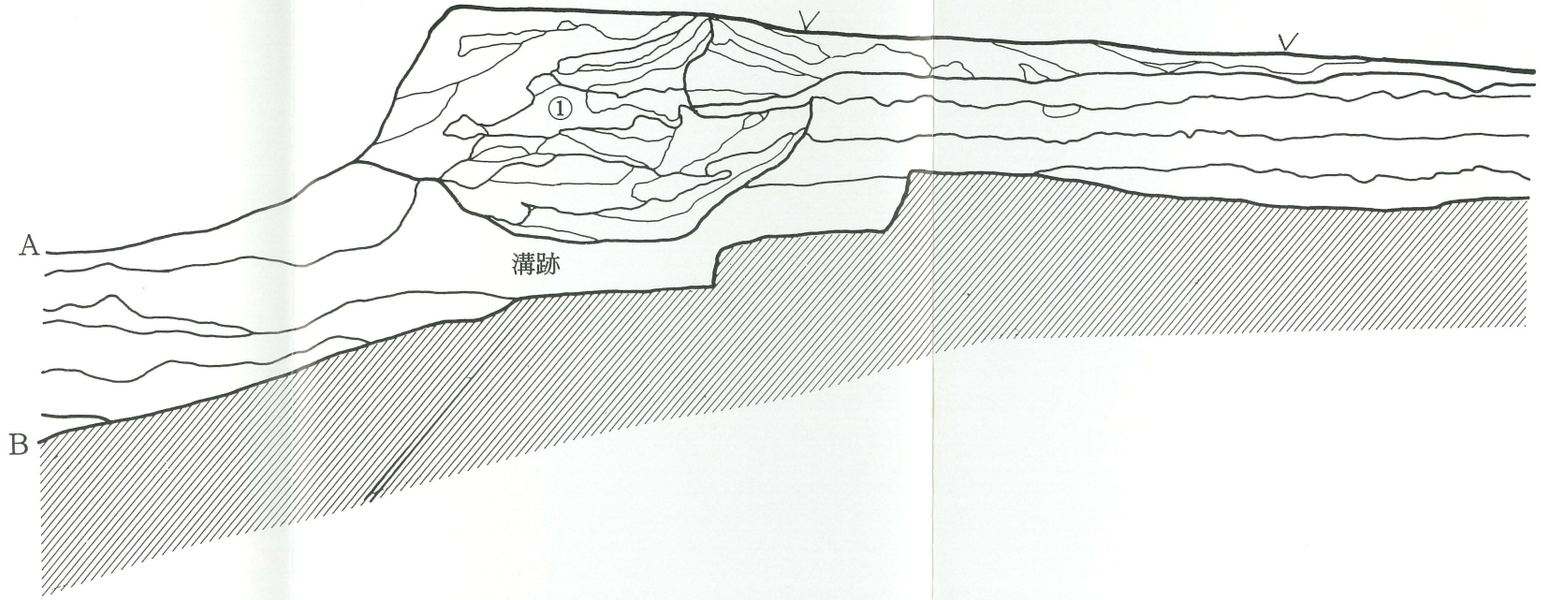


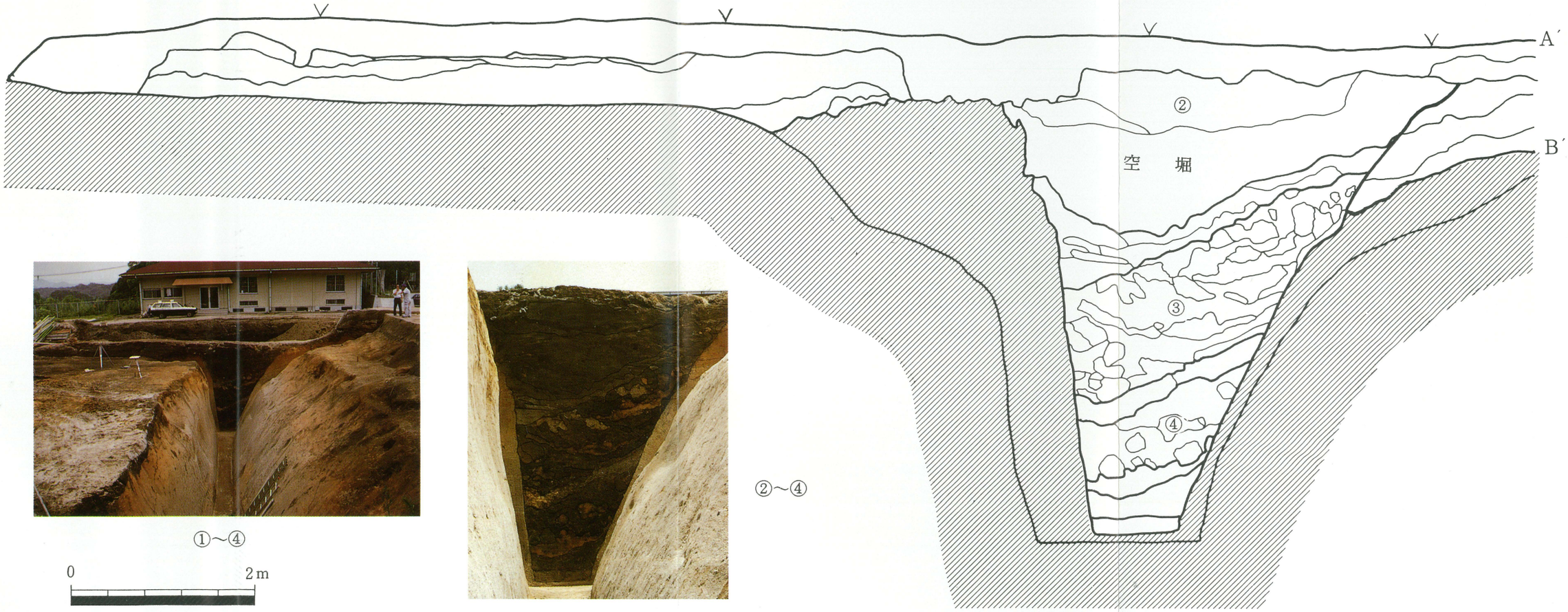
④，⑤

①～⑤

第７図　第２トレンチ堀切断面図及び検出状況

①



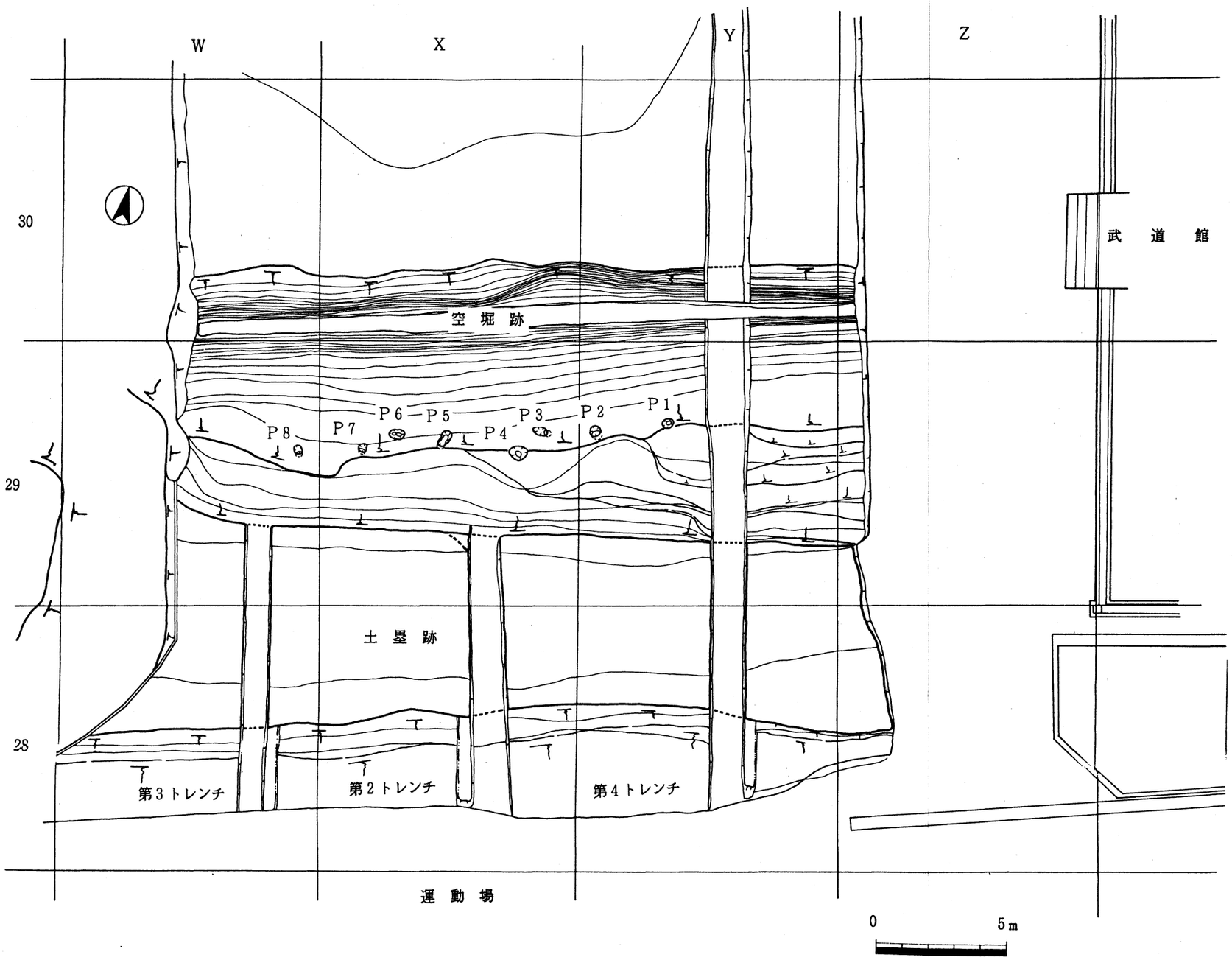


①～④

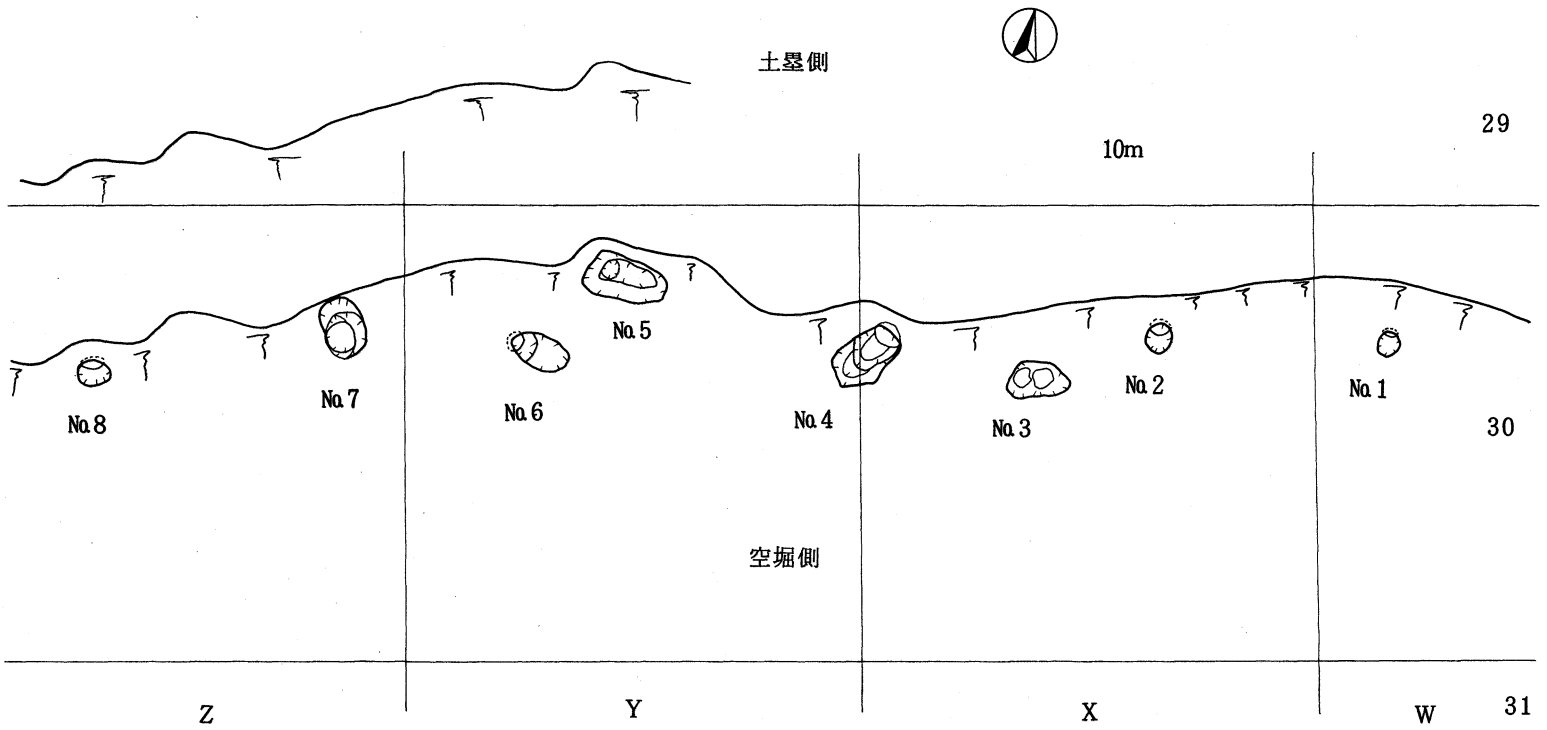
②～④

0　2m

第８図　第４トレンチ堀切断面図及び検出状況



第9図　空堀跡・土塁跡・柱穴（P1からP8）検出状況平面図

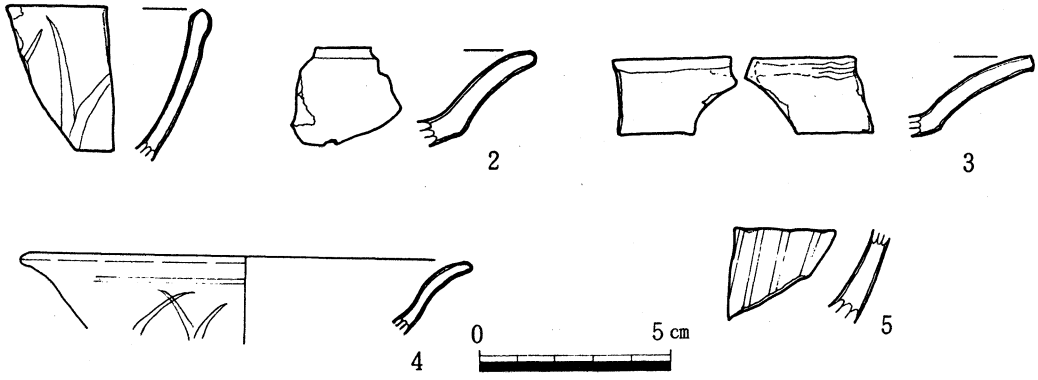


第10図　柱穴検出状況平面実測図

立てが行われており、旧表土が低かったことが想像される。しかしながら、土塁があったと想定される位置では表土直下がアカホヤの層である。さらに、そのアカホヤの層を切った状態での掘込みが検出され、空堀の南側の肩が判明した。また、北側の肩も地表面下約２ｍで検出され空堀があったことが確認された。

空堀は、幅８ｍ、深さ約５ｍを測り、南側は２つの段を有しながら傾斜しているが、北側はほぼ垂直になっており、片薬研堀状を呈する。堀内の埋土は、黒色土・灰黒色土・シラス・シラスと黒色土との混土などが互層をなしている。堀内からは青磁片がわずかに出土したのみである。

第２トレンチ（Ｘ－28・29・30区）は、土塁に直交するもので、屋内運動場のほぼ中央に向かって設定した。土塁の上部は削平を受けた状態で観察され、関係者の話しでも以前はもっと高かったということであった。調査の結果、現況で約１ｍの盛土が確認され、盛土はシラスとシラス混じりの黒色土等の互層になった状態であった。土塁の幅は、現在では13ｍを測るが、学校の施設が造られる際に土塁に土をつぎ足しており、もともとは約８ｍの幅である。土塁の高さは、削平を受けているために不明であるが、残存状態の良好な端の部分から推定すると３ｍ以上あったと思われる。堀は土塁の裾部分より堀込まれている。堀の状態は第１トレンチと同様に２つの段を有し、埋土の状況もほぼ同様である。しかし、堀は屋内運動場の建物の下へ続くために詳細は不明である。堀内からは青磁片がわずかに出土したのみである。



第11図　出土遺物実測図

１から５は、青磁の破片で、１から３は、第１トレンチの埋土より、４・５は、第２トレンチの埋土より出土した。１・５は、碗の口縁部破片である。磁胎は白灰色、施釉は、１が灰緑で、５が淡青色である。文様は、１・５ともに蓮花文を施し、５は、貫入がある。２・３は、稜花皿の口縁部の破片である。磁胎はともに灰白色で、施釉は、２は、灰緑、３は、淡青色を呈している。文様は、３が口縁部の内側に３条の圏線を描き、２は、文様ない。２・３ともに貫入があるが、２は、焼成が良くない。４は、碗の端反形の口縁部破片で、磁胎は白灰色、施釉は、淡青色で、文様は蓮花文を施している。

第２節　本調査の概要

調査は、確認調査時の結果に基づき、空堀の存在が確認されたために、土塁上の樹木類の除去、中学校屋内運動場の取り壊し、基礎のコンクリート塊などの除去作業と併行して、地形平板実測やグリッド設定などの作業から実施した。

まず、確認調査時の第２トレンチの掘り下げと土塁の残存状況を確認するために、第３・第４トレンチを設定し、それぞれ表土より掘り下げにかかった。その結果、旧地形が西側と南側へ大きく傾斜しているために、第２・第３トレンチでは黒色火山灰土、第４トレンチではアカホヤ層の上に土塁残存部の痕跡を確認した。

調査の結果、土塁残存部の基部は、第２トレンチが幅7.0m、第３トレンチが幅7.5m、第４トレンチが幅6.5mを測り、黒色土、シラス、黄橙色火山灰土、黄灰白色シラス土、灰白色シラス土などの混土やそれぞれの土がブロック状に堆積した状態で確認されたものの、土塁が構築された状況の痕跡は、大幅な削平のために僅かに残存しているのみである。

さらに、土塁残存部について、各区の表土より掘り下げた結果、運動場や屋内運動場側に新しく客土が継ぎ足されていることが認められ、その部分の除去作業を実施した。

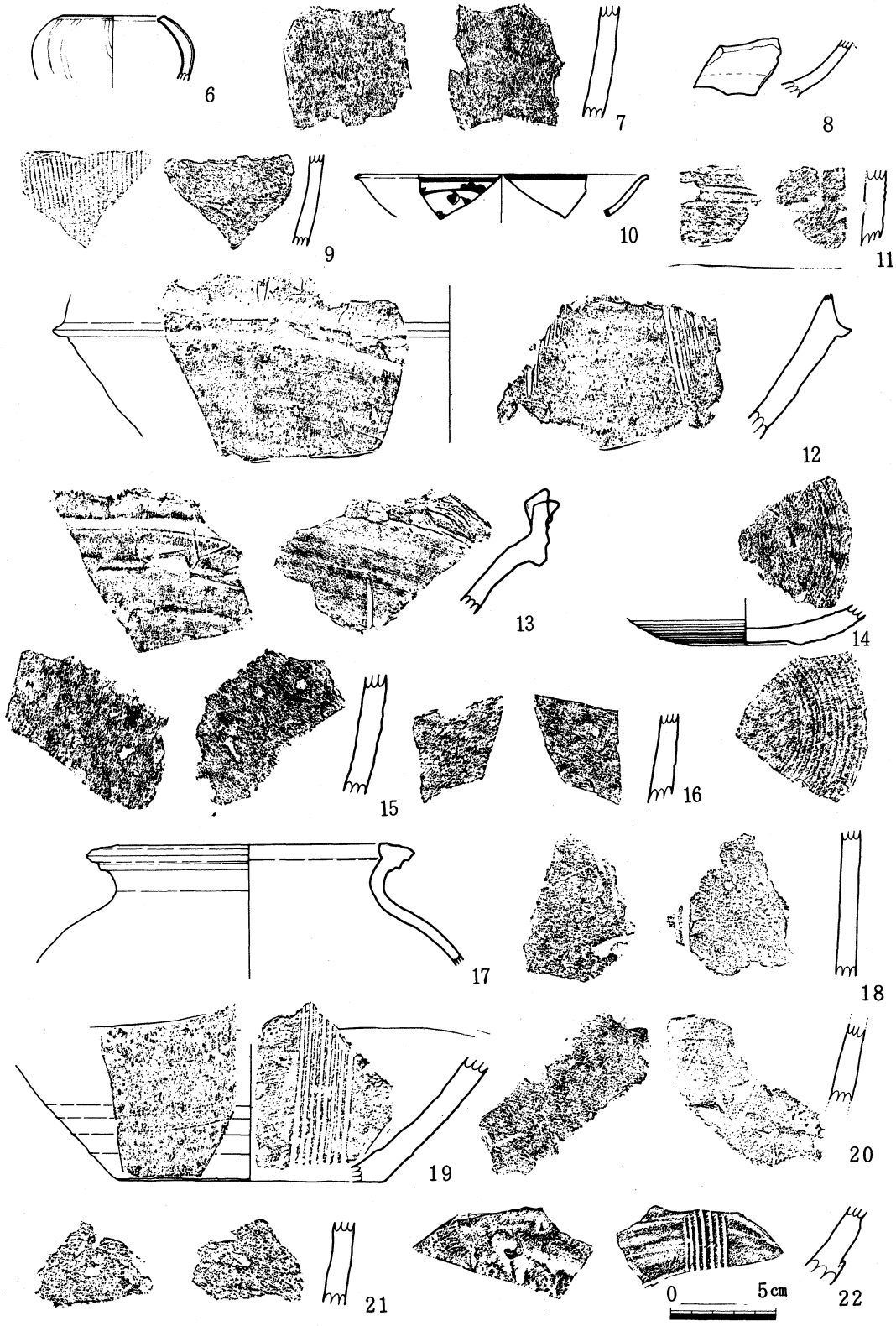
土塁残存部の表土除去後のＸ－28・29区の南側部分においては、アカホヤの層が確認され、その下位層である暗黒褐色土の一部より縄文時代の遺物包含層を確認し、土器破片や打製石鏃などの遺物が出土した。一方、Ｘ・Ｙ・Ｚ－29区の空堀側の土塁残存部分においては、現存で長さ16m、幅3.5m、深さ1.8mを測る溝状遺構が空堀により切られた格好で確認された。この溝状遺構は、周辺部は学校関係施設等のために大きく削平を受け、狭い範囲での確認のために性格については不明である。（第６図）

Ｗ・Ｘ・Ｙ－29・30区の空堀の調査においては、第２・３・４の各トレンチを延長して調査した結果、屋内運動場跡地は、建物の基礎の部分で大幅な削平を受け、基礎と基礎の部分についても、かなりの層まで学校建設時の造成で削平を受けている様子が確認された。

空堀の肩部は、土塁側では傾斜を保ちながら掘り込まれ、一方、反対側においては、表土下約1.5mよりほぼ垂直に掘り込まれ、その肩部の掘り込み部の幅は、第２トレンチで８ｍ、第３トレンチで7.5m、第４トレンチで7.2mを、それぞれ測る。

各トレンチの調査により空掘の部分が確認されたために、各区において空堀部の掘り下げにかかった。特に、Ｗ・　Ｘ・Ｙ－30区の埋土上位部では、軟質の黒褐色土や黒色火山灰土がいっぺんに客土したような状態で確認され、学校関係施設時の造成が考えられる。その下部においては、暗黒褐色土から上位の層である黒色腐植火山灰土、アカホヤ、暗黒褐色粘質土などが円弧滑りをしたような状態の埋土が確認され、その状況から学校施設関係造成前は、空堀が完全な状態で埋っていなかった様子が考えられる。空堀の最下部は、約１ｍ前後の幅で二次シラス、シラス、砂の互層の堆積が確認された。

埋土内よりの出土遺物は、青磁、陶器、擂鉢、染片などが埋土中位付近より若干出土したのみで、埋土上部付近は、現代陶器、ガラス製品、瓦片などが混在してみられた。



第12図　出土遺物実測図

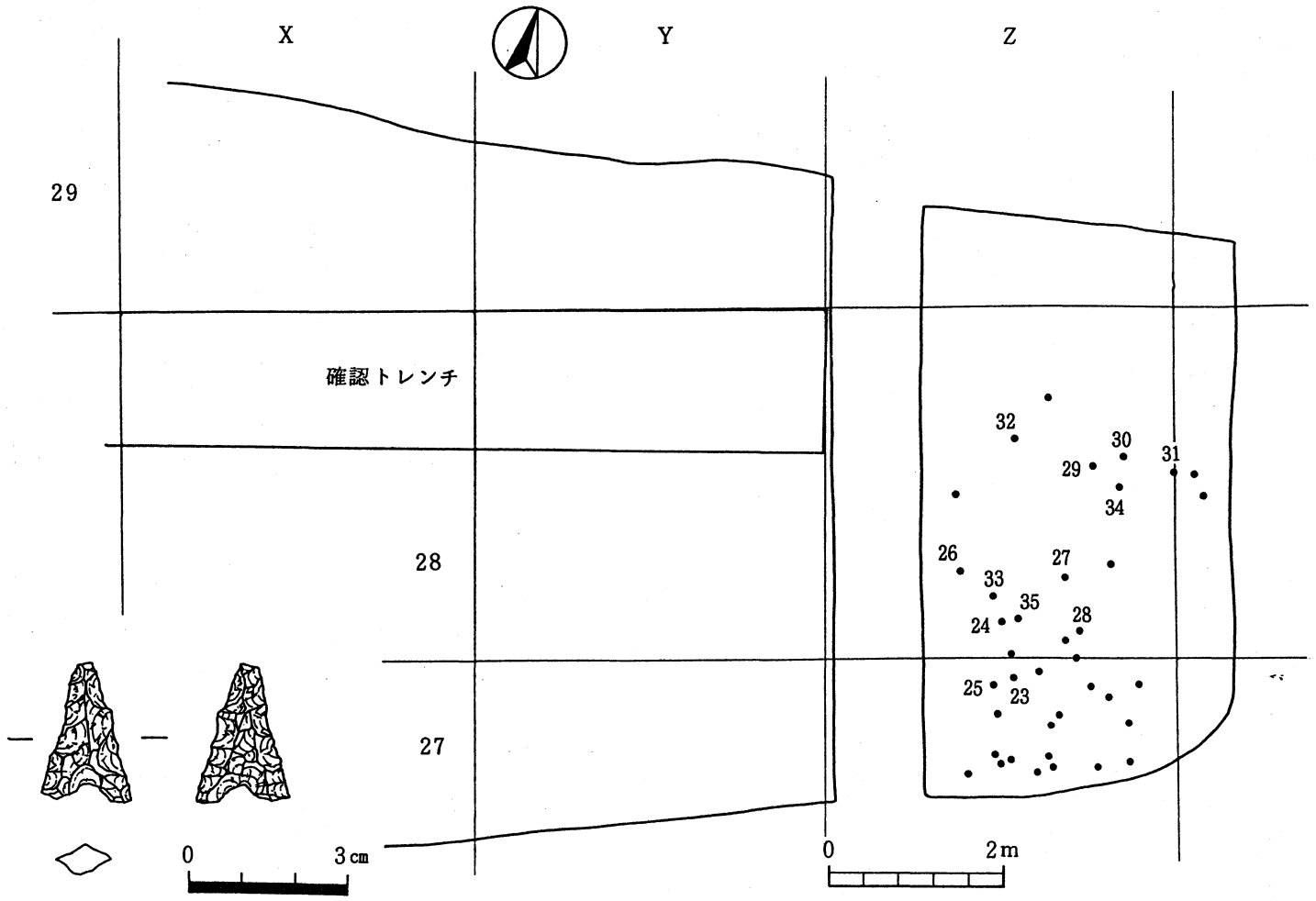
土塁側の空堀部分の肩付近においては、柱穴状の掘り込みを確認した。Y－29区では2箇所に検出し、P1は36×28cmの規模で、深さ66cm、P2は70×48cmの規模で、深さ147cmを測る。X－29区では5箇所に検出し、P3は56×38cmの規模で、深さ58cm、P4は94×52cmの規模で、深さ74cm、P5は80×54cmの規模で、深さ104cm、P6は70×34cmの規模で、深さ145cm、P7は30×34cmの規模で、深さ121cmをそれぞれ測る。W－29区では1箇所に検出し、P7は26×28cmの規模で、深さ119cmを測る。これらの柱穴の距離は、P1－P2は270cm、P2－P3は220cm、P3－P4は120cm、P4－P5は280cm、P5－P6は190cm、P7－P8は250cmを測り、堀に係わる柵などの施設が考えられる。

第3節　出土遺物

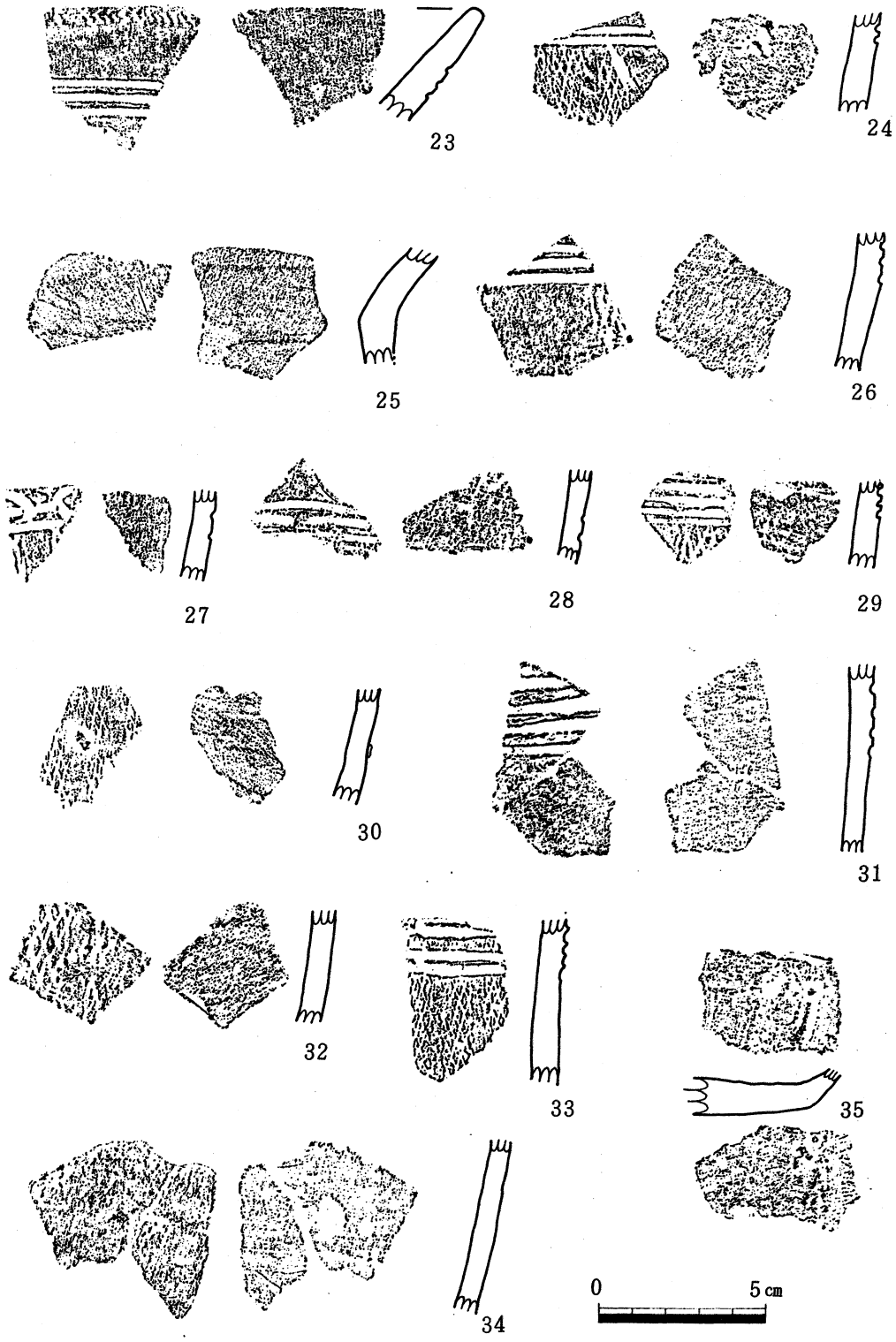
ここでは、確認調査や本調査の出土遺物について見てみたい。確認調査においては、第1トレンチや第2トレンチより若干の青磁破片が出土したのみである。本調査では、空堀の埋土の上位より現代陶器、ガラス片、現代瓦などの破片が見られ、埋土の中位付近より青磁、陶器、擂鉢、染付などの破片が混在して出土したが、量は多くない。

土塁調査後の下位の調査において、Y・Z－28・29区より縄文時代早期の遺物包含層が狭い範囲で確認された。その遺物包含層の残存部より塞ノ神式土器の破片や打製石鏃の出土があったが、小破片が多く図化できたものは多くなかった。

6は、青磁の小型壷の口縁部破片である。磁胎は白灰、施釉は緑灰で、文様は肉圧した蓮花文を施すものである。7・11・15・16・18・21は、陶器で、破片のために定かでないが、器種は甕の胴部が考えられる。色調は、7の外面が青灰色、内面が暗灰色、11の外面が暗茶灰色、内面が暗灰色、15の外面が暗灰色、内面が灰色、16の外面が暗灰茶色、内面が暗茶灰色、18の内外面ともに暗茶褐色、22の外面が暗褐色、内面が暗褐色を呈し、ともに焼成は良好である。8は、碗が考えられる底部付近の磁器破片である。磁胎は淡褐色、色調は内外面ともに光沢のある明茶褐色を呈し、焼成は良好で貫入をみる。9は、器壁の薄い須恵器の破片で、器種は不明である。外面は縦位の平行叩き、内面はなで調整が施され、色調は胎土および内外面ともに灰白色で、焼成は良好である。10は、復元口径14cmを測る染付の小皿で、端反り口縁部破片であり、稜が口唇部に付く。磁胎は灰白色で、光沢の鈍い青味を帯びた釉がかかり、口縁部内外はともに2本の圏線を施し、体部には破片のため定かでないが草花文を描いている。12・13・19・22は備前焼の擂鉢破片で、12・13は口縁部、19・22は底部である。12は、復元口径36cm、口縁部幅2cmほどを測る。口縁部下は外に張るため一条の稜線となる。口縁部は、成形の際に生じた凹凸があるために粗面を呈する。色調は、口縁部が暗茶褐色、他の内外面は明茶褐色から暗茶褐色で、素地は明茶褐色を呈している。内面の条線帯は1束6本である。13の口縁部下は外に張るため1条の凹線を巡らせ、色調は、口縁部が暗茶褐色、外面は赤茶褐色、内面は暗赤茶褐色で、素地は灰白色を呈している。内面の条線帯の一部と思われる痕跡が観察できる。19は、内外面ともになで調整で仕上げられ、内面には1束8条の条線帯を認める。色調は、内外面や素地ともに暗灰色を呈している。22は、内外面ともに赤茶色で、素地は灰白色を呈し、



第13図　縄文時代遺物出土状況及び石器実測図



第14図　出土遺物実測図

内面には1束7条の条線帯を認め、19・22ともに焼成は良好である。14・17は、薩摩焼の破片で、14は茶家の底部破片で、内外面ともに轆轤仕上の痕跡が顕著である。色調は内外面が暗灰色、内面には自然釉がかかり、素地は暗茶褐色で、焼成は良好である。17は、壷の口縁部から肩部にかけての破片で、口唇部には貝目がある。色調は、内外面ともに暗茶褐色で、釉がかかり、内面の一部は剥落し、素地は灰白色を呈し、焼成は良好である。20は、陶質土器で、破片のために器種は不明で、色調は、内外面や素地ともに明茶褐色を呈し、焼成は普通である。

23から25は、縄文時代の塞ノ神式土器の口縁部（23）、頸部（25）、底部（35）で、他は小破片のために部位は不明で頸部や胴部付近が考えられる破片である。

23は、ラッパ状の口縁部破片で、口唇部には右開きの羽状連続刻み目が、外面には横位に3条の沈線が施され、器面は、叮嚀に磨きあげている。色調は、内外面ともに茶褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。24・29は、頸部付近が考えられる破片で、網目撚糸文を施した後で、24は2条、29は、現存で5条の沈線を施し、調整は叮嚀な磨きあげである。色調は、内外面ともに赤茶褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。25は、頸部の破片で、調整は叮嚀な磨きあげ、色調は、外面が明茶褐色、内面が灰褐色を呈し、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。26は、頸部付近が考えられる破片で、わずかに遺存しているが、網目撚糸文を施した後で、現存で3条の沈線を施し、調整は叮嚀な磨きあげである。色調は、内外面ともに明褐色で。胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。27は、頸部付近が考えられる小破片で、網目撚糸文や沈線を施しているが、その構成は不明である。調整は叮嚀な磨きあげである。色調は、内外面ともに明褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。28は、胴部付近が考えられる破片で、現存で3条の沈線を施し、調整は叮嚀な磨きあげである。色調は、外面が明茶褐色、内面が明褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。30は、胴部付近の破片で、現存で3束の網目撚糸文を施し、調整は叮嚀な磨きあげである。色調は、内外面ともに赤茶褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。31は、胴部付近が考えられる破片で、網目撚糸文を施した後で、現存で4条の沈線を施し、調整は磨滅しているために不明である。色調は、内外面ともに明黄褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。32は、器面全体に網目撚糸文が施され、調整は叮嚀な磨きあげである。色調は、内外面ともに赤茶褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。33は、頸部付近が考えられる破片で、現存で3束の網目撚糸文を施した後、4条の沈線を施し、調整は叮嚀な磨きあげである。色調は、内外面ともに赤茶褐色で、胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成はあまり良くない。34は底部付近、35は底部破片である。色調は、34が内外面ともに明赤茶褐色、35の外面が暗茶褐色、内面が赤茶褐色を呈し、ともに胎土は、石英、長石、角閃石粒を含み、焼成は良好である。36は、無茎の凹基式の二等辺三角形石鏃で、頁岩製の石材を用い、先端部を僅かに欠く、現存全長2.7cm、最大幅1.8cm、最大厚0.6cmを測る。

第4章　まとめにかえて

鹿児島県下における中世山城跡は、昭和57年から昭和61年までの５ヵ年にわたって中世城館跡の調査を実施し、県下800余の城館跡がリストアップされている。

これらの城跡のなかには、開発のための土取り場もしくは運動公園等施設など大型開発の波及により犠牲になったものも多かった。しかし、開発が相次ぐなか、記録保存としての発掘調査が必然的となり、考古学的にも文献史学的にも解明しつつある現状にある。

城館跡調査は、多くが文献、縄張りなどが中心で、遺構や遺物などをも含めた調査は、鹿児島市の加栗山（川上城の一部）遺跡、鹿児島（鶴丸）城本丸・二ノ丸、苦辛城跡、川辺町の平山城、横川町の中尾田（片城の一部）遺跡、横川城、加世田市の村原（栫ノ原）遺跡（尾守ケ城）、上ノ城、大口市の平泉城跡、国分市の城山山頂遺跡、福山町の廻城、伊集院町の一字治城、蒲生町の蒲生城、姶良町の建昌城、吉田町の上城などが行われ、山城の規模・形態・構造など解明されつつある現状にある。

本町においても、新城、高城、内城、松尾城、安楽城、夏井城、陣岳塁などがあげられ、新城、高城、内城、松尾城を総称して志布志城と呼ばれている。

志布志城は、中世の争乱期に拡大強化され、内城本丸の山裾に居城を置いた平山城となり、常に志布志地方を治める領主などの居城が置かれていた。その後、徳川幕府の一国一城制により廃城となり、のち地頭が置かれたが城跡はそのままの姿となり、今日に至っている。近年では部分的に開発の波が押し寄せている。

城のつくりは、中世の山城の特徴を最もよく現わしており、現在の志布志小学校の背後が内城で６つのつくりからなり、歴代領主が志布志地方を治めていたところである。また、沢目記と西谷の間には、松尾城があり、志布志城のうち最初につくられた城である。志布志中学校の東側全面が高城で、南側全面が新城である。志布志麓一帯に対する備えと帖地区に対する備えとしている。

志布志城を拠点とする城主についてみると、文治年間（1185～1190年代・鎌倉時代）に松尾城を領していた救仁院氏　（救仁院平八直）が滅びたのちに、生涯を南朝に尽くして天平12年（1358）に大慈寺で亡くなった楡井頼仲、そして、志布志に入った畠山直顕、更に島津氏久・元久が入り、元久より志布志を受けた。それ以後の約200年にわたり志布志を領した新納氏、そして天文７年（1538）新納忠勝を退けた豊洲島津忠朝、さらに忠朝を破り志布志に入った肝付兼続が没して、薩摩・大隅・日向を島津氏が統一し、島津氏初代地頭鎌田政近まで志布志をめぐる中世の争乱の約400年間に豪族の興亡が志布志城を拠点に繰り広げられたという。

新城は、現在の志布志中学校運動場にある台地の南端、寺内（時宗・海徳寺跡）裏山にあたるところに位置し、東・西・南の三方を断崖に囲まれ、その頂上で北側が僅かに台地とつながっている。現在の志布志中学校体育館の所で、西谷と関谷の東西から谷が入り込んで最もせまくなった所に、高さ５m・幅10mの土塁が築かれていたが、現在では武道館側とその反対側にそ

の面影を残している。この城は、有事の時の外郭の砦であり、西側は志布志から松山・岩川への間道があり、関谷方面の守りと西側への備えとして築かれたものであろう。

新城の調査は、土塁残三存状況および空堀の有無に主眼をおいた。その結果、第１トレンチ（Ｚ－29・30区）では、土塁が削平を受け、昭和初期からごく最近までの間に何回か埋め立てられた痕跡が確認できた。しかし、地表下約２ｍで空堀の肩が検出され旧地形が低かったことが想像される。空堀は、幅８ｍ、深さ５ｍ、堀底面幅１ｍ、南側が２つの段を有しながら傾斜し、北側はほぼ垂直となっており、片薬研堀状を呈している。第２トレンチ（Ｘ－28・29・30区）では、土塁の上部が削平を受けた状態で、約１ｍの盛土残存部が確認された。その盛土部分は、シラスとシラス混じりの黒色土等の互層で、その幅員は８ｍを測り、残存良好の部分より推測すれば３ｍ以上あったと思われる。空堀の状況は、規模・幅員・埋土状況などが第１トレンチと同様であった。ともに埋土内からの遺物は、14世紀後半から15世紀の時期の青磁片が僅かに出土したのみであった。

本調査は、土塁および空堀の状況が確認調査と同様で、土塁側の空堀の傾斜する肩部に８ヵ所の柱穴を検出し、その状況より棚列の施設が考えられる。一方、Ｘ・Ｙ・Ｚ－29区の空堀側の土塁残存部分においては、現存で長さ16m、幅3.5m、深さ1.8mを測る溝状遺構が空堀により切られた格好で確認された。この溝状遺構は、周辺部は学校関係施設等のため大きく削平を受け、狭い範囲での確認のために性格については不明である。

埋土内からの出土遺物は、青磁、陶器、擂鉢、染付などが埋土中位付近より若干出土したのみで、埋土上部付近は、現代陶器、ガラス製品、瓦片などが混在してみられ、青磁は14世紀後半から15世紀のもので、備前焼の擂鉢、貝目をもつ薩摩焼などがある。

Ｘ－28・29区の南側部分においては、僅かな範囲にアカホヤ層を確認し、その下位層である暗黒褐色土より縄文時代早期の塞ノ神式土器や打製石鏃などの遺物が出土した。

この塞ノ神式土器は、河口貞徳氏分類によれば、塞ノ神式土器Ａａ式に比定されるもので、県内では、石峰遺跡、桑ノ丸遺跡、村原（栫ノ原）遺跡、榎木崎遺跡などや町内では鎌石橋遺跡、別府（石踊）遺跡から出土している。

参考文献

鹿児島県教育委員会「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（43）1987

大口市教育委員会「平泉城跡」大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）1982

伊集院町教育委員会「一宇治城跡」伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（44）1990

横川町教育委員会「横川城跡」横川町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）1987

加世田市教育委員会「村原（栫ノ原）遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）1977

加世田市教育委員会「上ノ城跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（２）1980

志布志町教育委員会「新城跡」昭和62年度事業報告書より一部所収

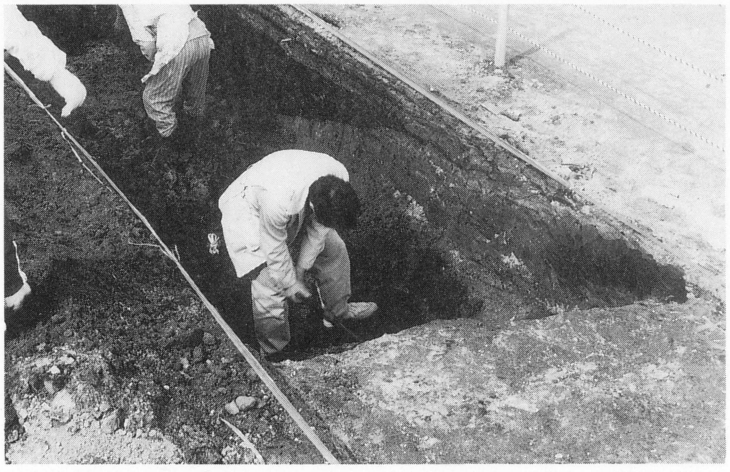
埋蔵文化財研究会「火山灰と考古学をめぐる諸問題」南・中九州篇　1987

写　真　図　版

図版1

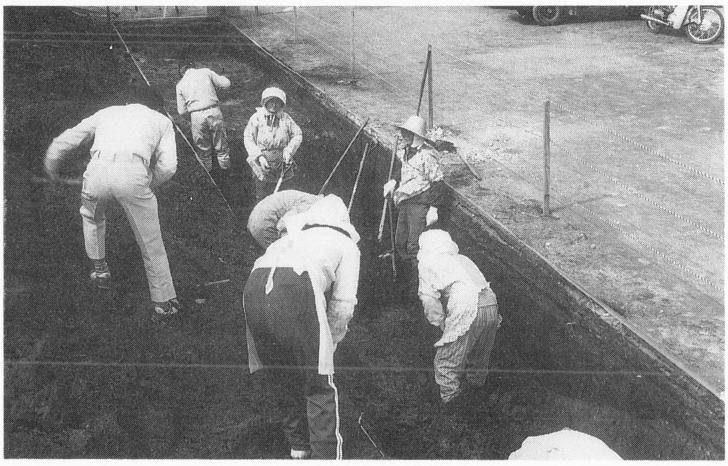
1．調査地全景（運動場側より）

2．調査風景（1トレンチ）



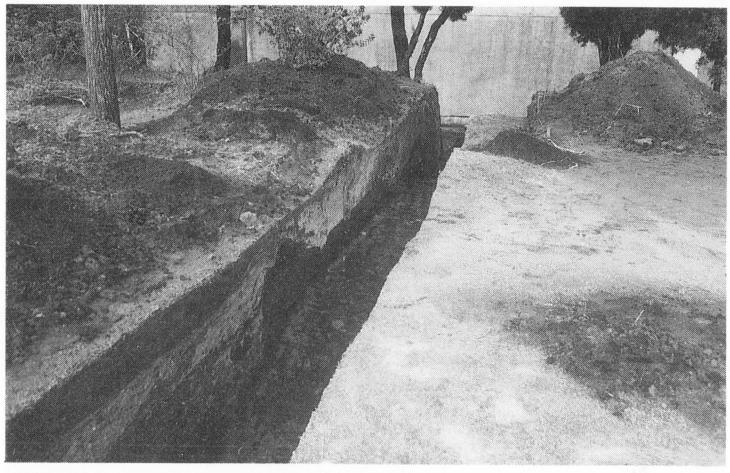
3．調査風景（1トレンチ）

図版2



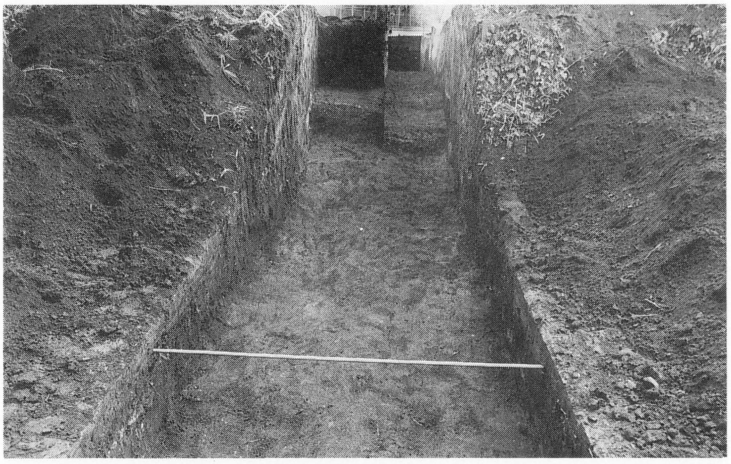
1．調査風景（1トレンチ）

2．盛土崩壊状況（1トレンチ）



3．土塁内完掘状況（2トレンチ）

図版3

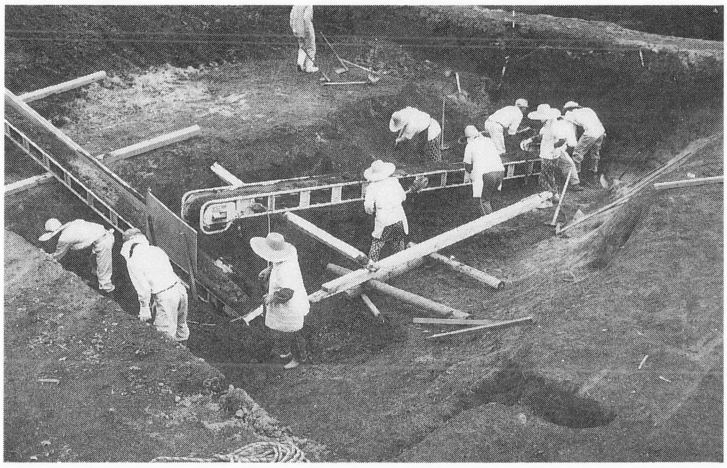


1．完掘状況（3トレンチ）

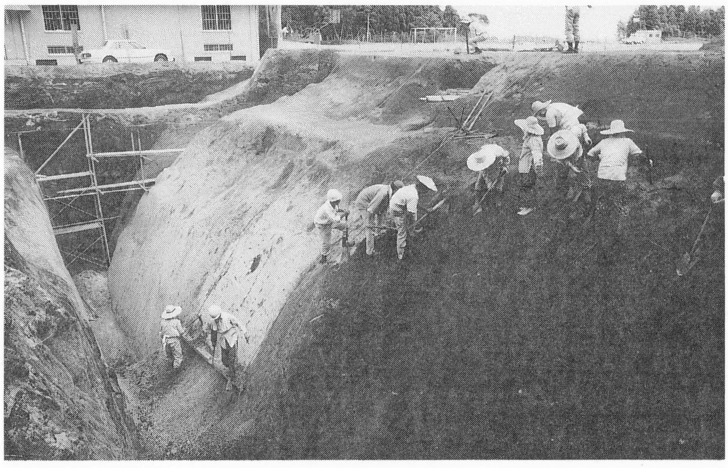
2．土塁盛土状況（2トレンチ）

3．空堀掘り下げ状況

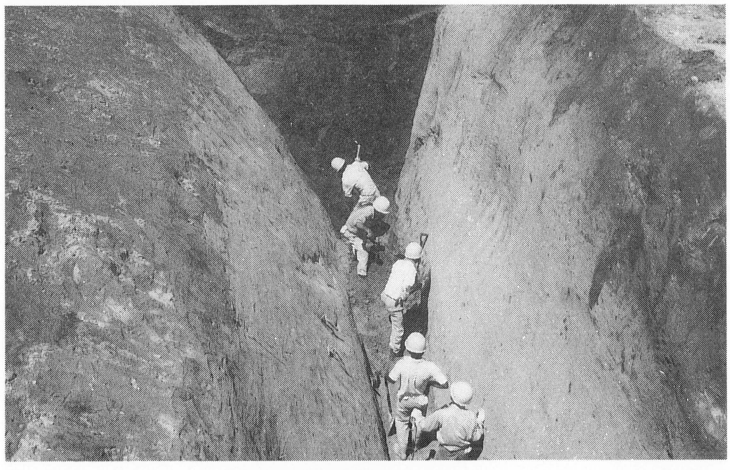
図版4



1．調査風景（空堀）



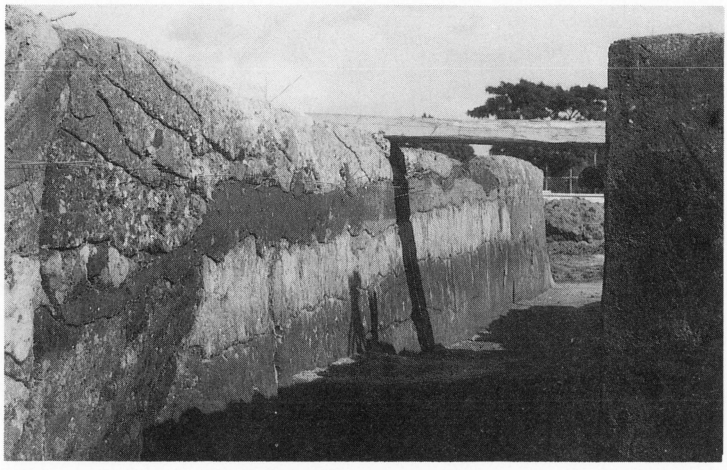
2．調査風景（空堀）



3．調査風景（空堀）

図版5

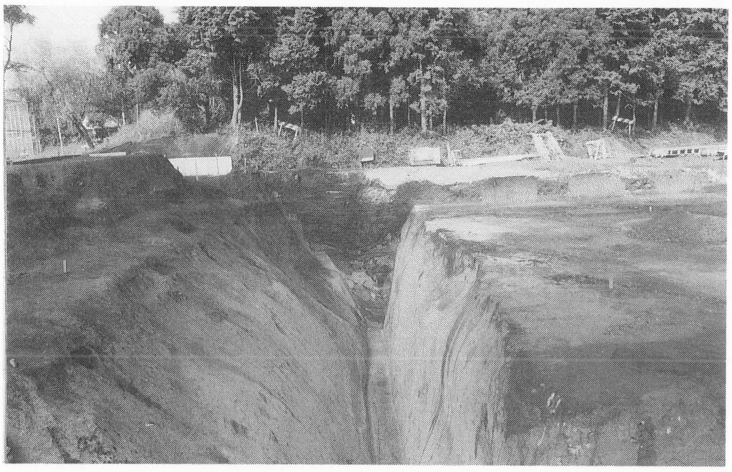
1．土塁残存部（向う武道館）



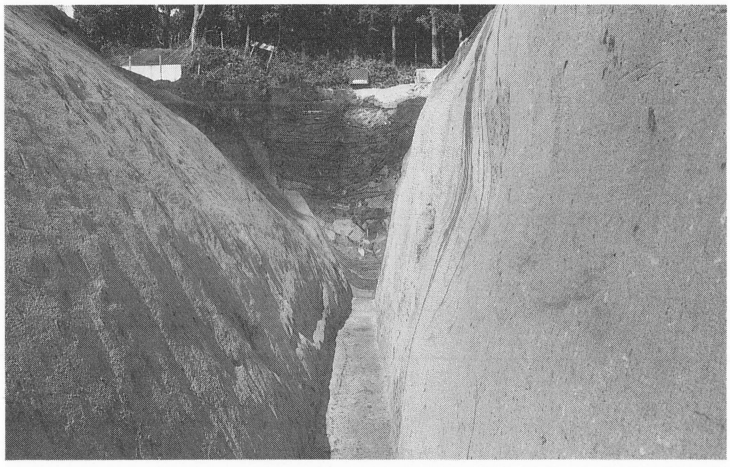
2．完掘状況（4トレンチ）

3．溝状遺構検出状況（武道館側より）

図版6



1．空堀完掘状況（武道館側より）

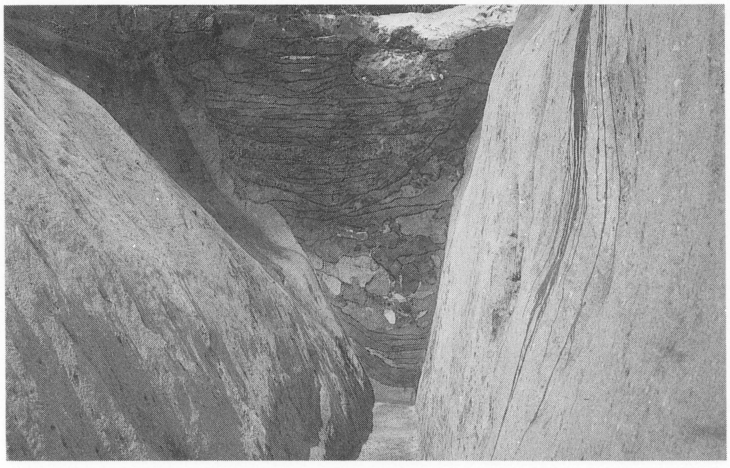


2．空堀完掘状況（武道館側より）

3．埋土土層断面実測風景（向う武道館）

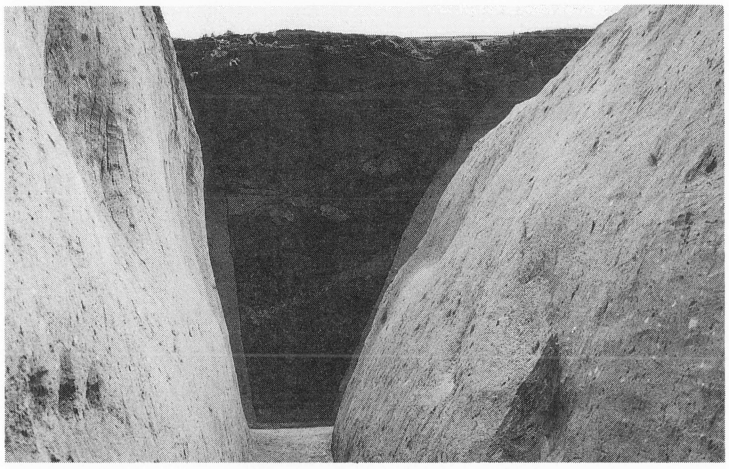
1．柱穴検出状況（土塁側）

2．柱穴完掘状況（武道館より）

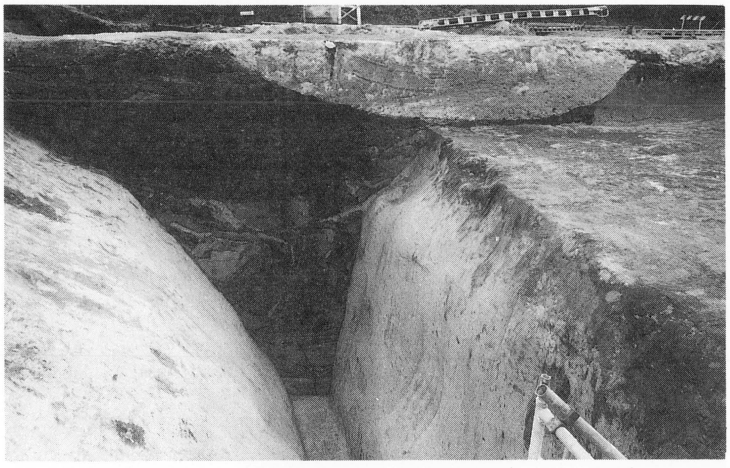


3．空堀埋土状況（武道館より）

図版8



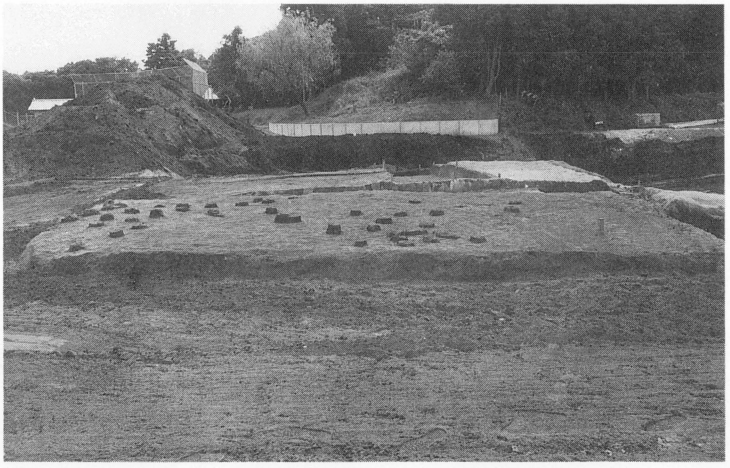
1．空堀埋土状況（武道館側より）



2．空堀埋土状況（武道館側より）

3．調査風景（縄文時代早期包含層）

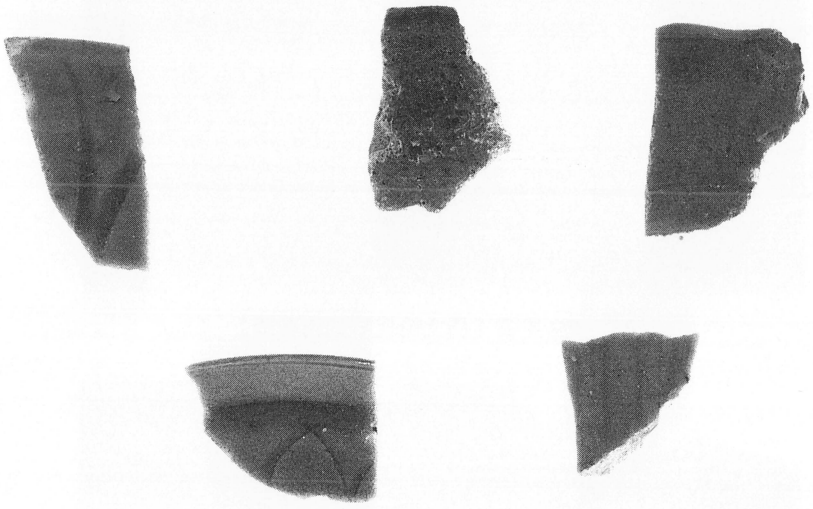
1．調査風景（縄文時代早期包含層）



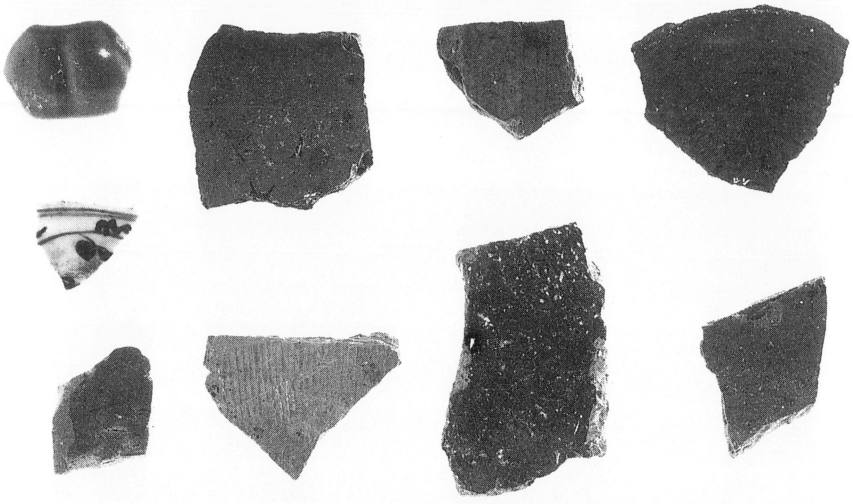
2．縄文時代早期包含層完掘状況

3．縄文時代早期包含層石器出土状況

図版10

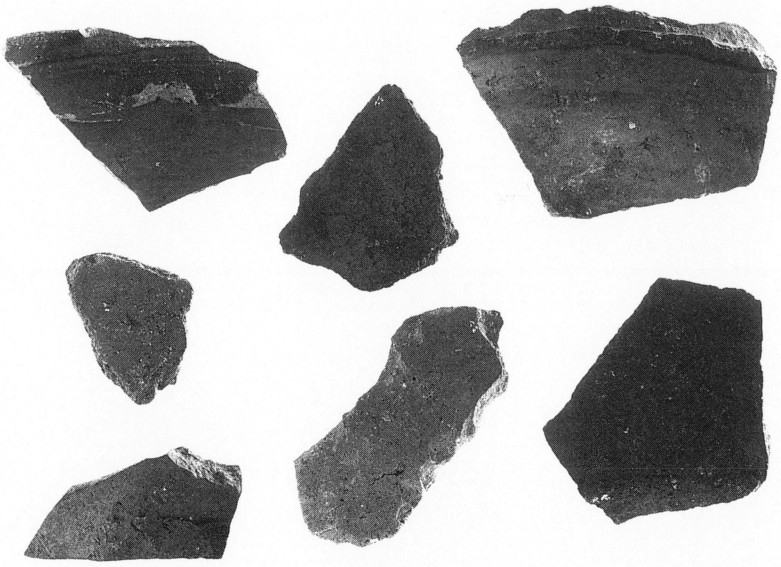


1．青磁

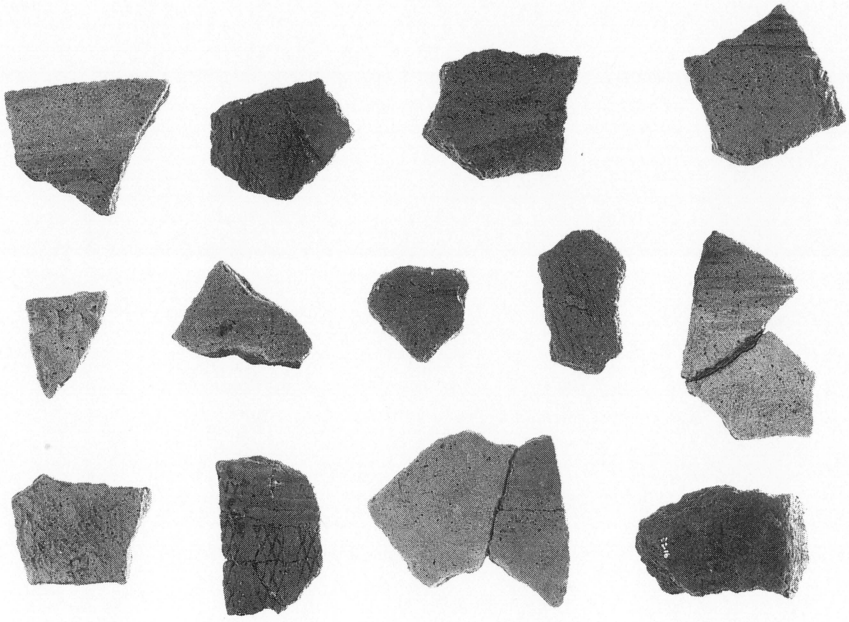


2．青磁・染付・須恵器・陶器

図版11



1．備前焼・薩摩焼・陶器



2．塞ノ神式土器

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（14）

志　布　志　新　城　跡

発 行 日　平成４年３月

発　　行　志布志町教育委員会（鹿児島県曽於郡志布志町志布志2542）

印 刷 所　志 布 志 印 刷（鹿児島県曽於郡志布志町安楽1966）